

---

# D・C?なのは s t r i k e r ' s 漆黒と桜花の剣士

京勇樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

D・C?なのは striker's 漆黒と桜花の剣士

### 【NNコード】

N4465Y

### 【作者名】

京勇樹

### 【あらすじ】

- 1年中桜が咲く初音島、ここでは現在最先端技術で魔法と科学が取り入れられて、デバイスが普及していた
- そして少年には暗く悲しい過去があつた、少年は裏の世界で生きて戦っている
- 少年は幸せに生きられるのか？ そして誰が少年を救えるのか・・・

## プロローグ始まり（前書き）

やつむぎつた感、**限界突破**！！  
でも後悔しません！！

一部変更しました

## プロローグ始まり

朝6時30分に俺、さきもりりゅうや防人裕也は田舎ましの音で起床した

裕也「さてと、エリオとキヤロの分の朝食を作らないとな」

俺は学校の、風見学園の制服に着替えてから自室を出て居間の右隣にある仏間に入つて仏壇を開けた

裕也「おはよう、お父さんお母さん、そして美樹」

仏壇に線香をつけてから俺は手を合わせて挨拶した

そこには2枚の写真があり、右の写真には俺の両親の防人幸也と母

親の防人彰子の写真があり

左側には大体小学3年生くらいの女の子が映つた写真が、名前は防人美樹さきもりみきと言う

俺は仏壇を閉めて、台所に入り冷蔵庫を開けた

裕也「今日はスクランブルエッグにするか」

俺は冷蔵庫内から材料を散りだして手早く調理し、俺のを含めて3人分用意してから時間を確認した。

裕也「ふむ、7時10分かそろそろ2人を起こすか」

俺は2人が寝ている部屋に向かう

俺達3人が暮らしているのは共栄住宅のアパート、まあ所謂団地だ

俺は”エリオとキヤロの部屋”と書かれたドアを開けると

裕也「ほれ、エリオにキヤロ、そろそろ起きろ、今日は2人とも旦直なんだろ?」

と寝ている義息子と義娘をゆすつて起こした

エリオ「うー、おはよう義父さん」

と赤い髪の毛をショートカットに切りそろえた男の子で名前はエリオ・モンティアルが眠そうに起きると

キヤロ「おはようございます・・・」

2段ベッドの下の段で寝ていたピンク髪の小柄な女の子が髪の毛がぼさぼさの状態で起きた、名前はキヤロ・ル・ルシェと言う

この2人は俺がある理由から助けて引き取った子供で現在9歳で、風見小学校に通っている

裕也「ほれ、ご飯できてるから、顔洗つて着替えろ」

2人「はーい」

2人の返事を聞いてから俺は台所に戻った

2人が来たのはそれから約10分後だ

3人「いきます！」

俺達は3人揃つてから朝食を食べ始めた

エリオ「ねえ、義父さん、今日はバイトあるの？」

エリオがお皿に盛られたスクランブルエッグを食べながら聞いてきた  
裕也「ああ、だから今日は何時も通りにリングディさんのところで夕食だな」

リングディさんはフルネームをリングディ・ハラオウンと言い両親が死んでから1番世話になっている人だ

同じアパートの上の階に住んでおり、俺がバイトで遅くなる場合は2人を預かってもらっている

2人「わかった」

そんな生活に慣れた2人は返事をしてくれた、・・・なんか申し訳ないな

そして朝食を食べ終わり食器を流しに浸けると

裕也「食器はそのままにしておけ、帰つたら洗うから」と俺は言い

裕也「そんじゃ、学校に行きますか」

2人「うん！」

2人は部屋にランドセルを取りに行つた

俺達がすんでるアパートは風見学園にしても、風見小学校にしても距離がある

俺は既に昨夜用意しておいた指定カバンを持った時だった  
ピンポンとチャイムが鳴り

？「裕也、時間だよ？」

とかわいらしい声が聞こえた

裕也「ああ、わかつたよ！」

俺はドアの向こうに聞こえるように返事し

2人「「準備完了」！」

と言つてラングセル（リオが青でキャラがピンク）を背負つて玄関まで来た

俺は2人を確認すると

裕也「それじゃあ、行きますか」

と言つてドアを開けると

？「おはよう裕也」

と先ほどと同じくかわいらしい声の本人が目の前にいた

裕也「ああ、おはようフェイト」

目の前の少女は太陽が跳ね返るような金髪に赤い眼をした美少女と言える子で名前はフェイト・T・ハラオウンと言い俺の幼馴染だ

フェイト「エリオとキャラもおはよう」

とフェイトは俺の後ろに居た2人にも挨拶した

2人「「おはよう」ぞいます！ フェイト義母さん！…」

義母さんというのはこの2人を引き取る際に俺だけでは無理だったのでもフェイトに名前を貸してもらったのだ、だから名義上は俺とフェイトの子供と言つことになる

フェイト「うん、おはよう、あ、そうだ裕也、はいお母さんからお弁当だよ」

とフェイトは左手に持っていた青い包みのお弁当を俺にくれた  
裕也「毎度ありがとうございます、リンディさんにもお礼言つといてくれ」  
フェイト「ううん、いいのお母さんは好きでやつてるみたいだし」  
俺は貰つた弁当を持つて

裕也「それじゃあ今日も一日元気に過ごしましょ！」

3人「「うん！（はい！）」」

こうして俺達の1日が始まった

## プロローグ始まり（後書き）

さてと作者の思いつきで始まりました  
がんばって書きますか

## 設定（11月18日追加）（前書き）

今回は主人公と主なキャラの設定です

アリシアのデバイスの名前変えました  
杉並と高坂まゆき、天枷美夏、高町なのは、コーン・スクライアを  
追加しました。  
主人公の設定に追加アリ

## 設定（11月18日追加）

防人 裕也、風見学園付属3年3組に所属している学生で身長は176cm

体は全体的に細いが痩せている訳ではなくかなり鍛えられている、エリオ・モンディアルとキヤロ・ル・ルシェを養子として引き取つていて育てている、生計は両親の遺産とバイトとある仕事でまかなっている

髪は黒く後ろだけ背中位まで伸ばしておりそれをヘアバンドで纏めている

顔立ちは丹精だが左目に傷と、と”ある物”を隠すための眼帯を着けている、右目の瞳の色は黒

同じアパートにはクラスメイトの沢井 麻耶と幼馴染のフェイト・T・ハラオウンと先輩の高坂まゆきが住んでいる

使用デバイスはインテリジエンスデバイスの阿修羅、モードは高機動を主体に近接格闘戦と近接戦闘、遠距離戦闘が可能なオールランダー、カートリッジシステムを搭載している

バリアジャケットは両肩に侍の肩当と両手と両足に侍の鎧のような手甲と脚甲を装備しておりそれ以外は制服そのままの格好になっている

本人が使う魔法はミッドミチルダと古代ベルカと本人の家のためか特殊な陰陽術、及び西洋魔法を使う、更に本人の空間魔法で複数の日本刀を所持・封印している

レスキル  
希少技能、魔力の全属性変換資質

フェイト・T・ハラオウン、風見学園付属3年3組に所属している学生

髪は太陽の光が跳ね返るような金髪で瞳の色は赤、身長は一般的な

女子と同じ位でプロポーションはかなりのもの

双子の妹で姉にアリシア・T・ハラオウンが居る

兄は名前はクロノ・ハラオウン、風見学園の風紀委員で副委員長の役割を受け持っている

使用しているデバイスはインテリジェンスデバイスのバルツィディシユ・アサルト得意なのは主に高機動近接戦闘、カートリッジシステムを搭載している

バリアジャケットはリリカルなのはを参照

使う魔法はミッドミチルダと近代ベルカ

希少技能、魔力の雷変換資質

桜内 義之、風見学園付属3年3組に所属している学生

髪は黒でショートカット、瞳の色は少し茶色がかつた黒

本人の意思とはまったく関係無しに風紀委員にブラックリスト入りされている

両親は不明、養母は風見学園の学園長の芳野さくら

隣の家の朝倉家とは昔から家族同然に育つていて、生徒会長の朝倉音姫には弟くんと呼ばれ、音姫の妹の朝倉由夢には兄さんと呼ばれている

使用デバイスはインテリジェンスデバイスの桜花、得意なのは高機動近接格闘と遠距離砲撃戦、カートリッジシステムを搭載

使う魔法はミッドミチルダと近代ベルカ

希少技能、未来予知（限定的）と魔力の桜の花びらへの変換資質とお菓子（和菓子限定）の構成

アリシア・T・ハラオウン風見学園付属3年3組に所属している学生

髪はフェイントと同じ金髪で瞳の色は水色

身長は一般的な身長でプロポーションは完璧

双子の姉で妹はフェイント・T・ハラオウン

兄の名前はクロノ・ハラオウン

使用しているデバイスはインテリジェンスデバイスのアテナ、得意なのは高機動近接戦闘と中距離砲撃戦闘、カートリッジシステムを搭載している

バリアジャケットは蒼い着物みたいなジャケット（イメージ的にはガンダムSEEDのラクスが着ていたもの）

使う魔法はミッドミチルダと近代ベルカ

希少技能魔力の雷への変換資質

杉並、風見学園付属3年3組に所属している学生

髪は黒瞳の色も黒

身長は約171cm、運動神経抜群、頭脳明晰とかなりの能力を誇るが風見学園切つての問題児

非公式新聞部なる部活（？）に所属しており、イベントの度に何かしらの行動を起こす困った奴、しかも大抵が義之を巻き込む為、義之もブラックリスト入りされた。

使用しているデバイスはインテリジェンスデバイスのテスタメント、得意なのは高機動近接格闘戦と遠距離砲撃戦闘でカートリッジシステムを搭載している。

バリアジャケットは黒い西洋鎧の身体の部分が無い状態で有るのは手甲と脚甲と肩当程度で背中には膝丈まである黒いマントが特徴

使う魔法はミッドミチルダと近代ベルカ

希少技能魔力の闇への変換資質

高坂まゆき、風見学園本校2年3組に所属している学生

髪は藍色、眼の色は茶色

身長は161cmと女子にしては少し高い様子、運動神経が抜群で陸上部に所属しており得意なのは走り高跳びだが陸上競技全般で高い成績を保持している、尚生徒会副会長も兼任しており半ば杉並専門の追跡者となっている、尚義之、杉並、渉、杏、が同じクラスな

のは彼女が学年主任に提案したからである。

使用しているデバイスはインテリジェンスデバイスのエクスカリバー、得意なのは高機動近接格闘戦と中、近距離戦でカートリッジシステムを搭載している

バリアジャケットは白いジャージ状で身体の側面と正面に青い線が入っており、足には移動力強化のためか脚甲にローラースケートが着いている

使用魔法は主には近代ベルカだが時々ミッドミチルダも使用する  
レアスキル  
希少技能魔力の風属性への変換資質

あまかせみなつ  
天枷美夏、風見学園2年1組に所属している学生

髪と眼の色は青で統一されている

何時も牛柄の帽子を被つており首には赤いマフラーを巻いている、人間ではなく2059年より約50年前に製造されたロボットのプロトタイプで本来は2059年に起きる予定ではなかつたが、杉並と義之によりの偶然の行動（主には義之だが）により起動した、過去のとある理由により人間嫌いに陥っているが本来は優しく素直な子、義之たちを基本的には呼び捨てにしているが、ある理由により杏だけ先輩と慕っている。尚性能上どうしても8時間に1回バナナを食さねばならない、本人はバナナが嫌いと豪語しているが本当は好き。

使用しているデバイスはかなり特殊なストレージデバイスのコロス（ギリシャ演劇のバックコーラスより）、本来はインテリジェンスデバイスだったが搭載予定だったAIのMIAKIというAIが何故かきちんと起動せず、まるで本来の主を待っているように沈黙を保っている。

美夏のAIとリンクするためある意味、美夏自身がインテリジェンスデバイスとも言える。

尚美夏には当時の技術では人工リンクカードが再現できなかつたため本来は魔法は使えないが、コロスに特殊なシステムが搭載されて

おり周囲の魔力を吸収して魔法を使用できるようにした。

バリアジャケットはなのは本編のナンバーズと同じようなインナーが展開され、その上に白いジャンパーと白い半ズボンを纏い手と足に肘と膝まで覆うような手甲と脚甲が展開する、尚脚甲の足首部分には紺色の6角形の宝石状の物体が埋まっており「ウイング・ロード」が使用できる、のと脚甲にはローラーが着いている

両手甲の部分には左右3つずつ小さい珠が埋まっており美夏本人が視認した魔法を左右3つずつ、合わせて6個ストックできるし、一度見た魔法は構築に時間が掛かるが構築可能

尚更に特殊なシステムでカートリッジシステムが搭載されており、ストックした魔法を本来魔力を圧縮する薬莢に圧縮して保存することができになつていて、圧縮した魔法により色が違ひ見間違えないように薬莢の側面には魔法の名前が記載される、尚圧縮するための薬莢を入れる場所は手首の部分に3発ずつ入れる事が可能で、発動するためには薬莢を手首から外して肘の内側の穴に入れる必要がある。

更にフルにストックした魔法を使用及び圧縮しないで新しくストックしようとした場合古くストックした魔法から消えていく得意レンジ無し、あえて言うならば魔法を構築する時間が稼げる遠距離が得意、しかしあまり遠すぎると視認できなくなるためどうしても近づく必要がある

得意魔法及び希少技能無し

たかまち

高町なのは、風見学園付属3年3組に所属している学生

髪は栗色で眼の色は黒に近い灰色

身長は平均的

明るい性格で不屈の心を持つており、通称「エース・オブ・エース」と呼ばれている

因みに”悪魔”や”魔王”、”冥王”等と呼ばれるとキレて言葉が片言になる

使用しているデバイスはインテリジョンスデバイスのレイジングハート・エクセリオン

バリアジャケットはなのは本編を参照  
カートリッジシステムを搭載している

得意なのは中距離と遠距離砲撃と超遠距離精密砲撃で他のキャラに比べると機動力は劣るが防御力が高い

使用魔法はミッドミチルダのみ  
レスキル

希少技能無し 追記魔力の総量は事実上測定不能状態らしい

ユーノ・スクライア、風見学園付属3年3組に所属している学生  
髪は金髪で眼は緑色

身長は170cmくらい

優しい性格で押しに弱いが成績はトップクラス

尚付属生でありながら名誉図書委員と言う肩書きを得てあり、理由としては本校と付属にある2つの図書館の膨大な蔵書中から指定された本を1発で発見できる特殊な検索魔法を有しているから

変身魔法でフェレットにもなる

使用しているデバイスはインテリジョンスデバイスのハイペリオン、カートリッジシステムを搭載している

高機動中距離と同遠距離砲撃が得意

バリアジャケットは西洋騎士の軽装鎧で色は白と青のツートンカラーで左手に大きさが変更できる楯を保持している

使用魔法はミッドミチルダのみ  
レスキル

希少技能無し

設定（1-1月1-8日追加）（後書き）

この設定は毎月1-8日で更新します

## 騒がしい朝の風景（前書き）

裕也「やまと義之は起きてるかな？」

## 騒がしい朝の風景

フェイト「今日も義之のところに行くの?」

フェイトが曲がり角のところに聞いてきた（ヒリオとキャラとは既に別れている）

裕也「ああ、まあ恐らく既になのはか由夢ちゃんか音姫さんが行つてるだらうけどな

今言つた3人は義之こと桜内義之の幼馴染だ

特に由夢と音姫の2人は兄妹同然に育つた仲だ

そんなこんな言つてる内に義之の家の前に到着したら

由夢「兄さんいい加減に起きてください！」

とこう声が聞こえた

裕也「おーおーやつてるね~」

フェイト「裕也そんな暢氣に言つていいの?」

と言つた瞬間だった

なのは「由夢ちゃんどこへ!」

裕也「ん?」

フェイト「なのは?」

やつぱりなのはも居たようだ

由夢「ちょ!?」なのは先輩それは流石にマズい!..」

由夢よ少し言葉づかいが怪しくなつてゐるぞ~

なのは「全力全開! ディバイン・バスターーーーーー!..」

と聞こえた瞬間桜色の光が義之の部屋の2階の窓を埋め尽くした

義之「ギャーーーーーーーーーー!..」

義之の悲鳴が!..

裕也「・・・・・・」

フェイト「・・・・・・なのは」

俺は睡然としてフェイトは米神を押さえながら唸るしか出来なかつた

10数分後

義之「なのは！ お前は俺を殺す気か！」

俺達は学校に向けて走っていた

なのは「素直に起きない義之君が悪いんだよーだ」

フェイト「いやだからってティバイン・バスターはやりすぎだよ、  
なのは」

なのは「起きたんだから結果オーライ！」

裕也「それで殺されかけたんじゃ割に合わないぞ」

と言つてゐるうちに

由夢「ここまで来れば大丈夫ですね」

由夢「ここまで来れば大丈夫ですね」

ここ桜公園は1年中桜が咲く初音島でも1番桜の木が植えられる場所だ

清掃業者曰く「ここがあれば俺たちは安泰だ」らしい  
何でかと言つと桜の花びらの回収だけでも1年中暇が無いからだ  
因みに今の季節は冬だ、季節感もへつたくれもない  
と歩いていると校門が見えたが

義之「なんか騒がしいな」

なのは「だね」

そう学校のほうがなんか騒がしいのだ

?「はつはつは！ 捕まえてごらんなさいー！」

その原因は今分かったが

裕也「杉並か・・・」

義之「あいつはまた・・・」

杉並とは学園に存在する非公式新聞部なる団体を率いていろいろトラブルを起こして本人曰くイベントを面白くしている困った奴だ  
フェイト「どうする裕也？」

裕也「行くか一応俺達も非常要員とはいえ生徒会なんだ」「フェイト」わかつた

俺たちはカバンを開けて中から生徒会を示す腕章を取り出して右腕につけた

フェイト「じゃあのはカバンお願いね」

裕也「義之頼んだ」

俺とフェイトはカバンと弁当を預けると走り出した

?「杉並ー待てー！」

フェイト「まゆき先輩！」

裕也「援護に来ました！」

まゆきとは本名、高坂まゆきといい生徒会副会長であり風紀委員会の委員長でもある通称生徒会長の懷刀だ、因みに会長は音姫さんだ

裕也「つてデバイス展開してるし」

杉並「ちい剣使い『ソードダンサー』に優しい閃光が来たか！」

杉並は既にインテリジェンスデバイスのテスタメントを展開していた黒い装甲に黒いマント手には短刀型のアームドデバイスを持っていた因みに剣使いに優しい閃光とは俺とフェイトの渾名だ

裕也「仕方ない、阿修羅セットアップ！」

俺は右手首の腕輪を前に突き出しながら言った

阿修羅＜承知！＞

フェイト「バルディッシュ！ セットアップ！！」

フェイトは黄色の三角形のペンドントを手の上に乗せながら言った

バルディッシュ＜イエス・サー＞

次の瞬間には俺たちはバリアジャケットに包まれていた（詳細は設定をご参照ください）

俺の両手には刀型のアームドデバイスが2本あり、フェイトは右手に鎌を彷彿させる杖を持っていた

まゆき「準備完了したら突撃！行くよエクスカリバー！」

エクスカリバー＜了解＞

エクスカリバーはまゆき先輩のインテリジェンスデバイスで待機形

態はネックレスの白い宝石状で展開すると両刃の大剣になるバリア  
ジャケットは白を基調として青いラインが入ったジャージとマント  
と手甲だ

裕也＆フェイト「「了解！！」」

俺達が突撃すると

？「あかん！ フェイトちゃんに裕也君まで来たんか！？」

この声は・・・

フェイト「はやてまで・・・」

はやてこと、八神はやてがそこ居た

既にはやはりイン？とコニゾンした姿になっていた（詳細はなのは本編を参照）

杉並「同志八神よ撤退だ！」

はやて「了解や！」

と2人が逃走しようとしたとき

？「「ウイング・ロード！」」

と聞こえて青と白の帯状の道が逃走する2人まで伸びた

フェイト「これは」

裕也「スバルにギンガさんか！」

スバルとギンガとは風紀委員会に姉妹で所属している本名はスバル・ナカジマとギンガ・ナカジマと言う

2人も既にバリアジャケットを展開して身にまとっている（詳細は本編を参照）

スバル「裕也先輩にフェイト先輩おはよハジセコマサー！」

スバルは相変わらず元気だ

ギンガ「裕也君にフェイトさんおはよハジセコマサ」

裕也＆フェイト「「おはよハジセコマサー！」」

俺達が挨拶すると

なのは「うわー」

義之「派手にやつてるなー」

由夢「本当ですね・・・」

どうやら歩いていた義之たちが来たようだ

「二年生の間、風呂敷の下に籠が入るか……」

杉並となのは以外「 」「 」「 」「 」「 」「 あ」「 」「 」「 」「 」「 」

でしお、たなあの黒鹿

は、この二つの事実から、この黒い力が、黒い魔の力であることを知る。

裕也」總員退避——！

俺は全力で叫ひながら全速力で杉並たちから離れた

を始めた

はやでーちよ!!? ウチまで巻き込みかーしな!!」

卷之三

俺は両手に持つ不

の腰の辺りにモニテレモ

俺の手には静電じこうが届いた。

裕也「間に合え！」

俺は靈切を地面に突き刺して呪文を唱えた

裕也 五雷神君の奉勅 五雷神君の天心下り 十五雷の正法を生す  
邪淫禁况、悪業戒す清禁、天地万物の理をもひて微塵と戒す！

十五雷正法十一散、禁！」

雷切から凄い雷が走りそれが俺達を囲む壁になつた瞬間たつた

卦之謂也。」

杉並とはやての悲鳴が響いた、つて！

リテイントレーニングか！！

## 音姫 - アイギス！！

どうやら学校の校舎は音姫さんが自身のインテリジェンスデバイスのアイギスで護つたようだ

そして閃光が収まるごとグラウンドは死屍累々の状況でクレーターが出来ておりクレーターの真ん中にははやてだけが倒れていた

裕也「杉並には逃げられたか・・・」

俺はため息をつきながら言った

裕也「皆無事か?」

俺は後ろにいた全員と腕に抱えていたフェイトに聞いた

フェイト以外「私は大丈夫ですが、フェイトさんが・・・」

裕也「へ?」

俺は腕の中にいたフェイトを見た

フェイト「・・・・・(顔真っ赤)」

フェイトが顔を真っ赤にして固まっていた

裕也「おわ!? フェイト! ! ? ?」

俺はフェイトを搔きぶつたが反応は返つてこなかつた

こつして俺達の1日は始まつたのだった

## 騒がしい朝の風景（後書き）

裕也「フェイト、大丈夫か？」

フェイト（まだ顔を赤くしながら）「うん、大丈夫……」

## 名前と能力募集（前書き）

今回は募集です

## 名前と能力募集

此度は私、京勇樹けいゆうきの力量不足（？）とイメージ不足により天枷美夏あまかせみなつとエリカ・ムラサキ両名のデバイス名と能力が決められないでの皆様に募集させていただきます

使用者

デバイス名

バリアジャケットの形の詳細（武器か杖の形含めて）

使用魔法

得意レンジ

カートリッジシステムの有無

インテリジェンステバイスなのがどうかも書いてください！

あるなら変形時の形とパターン数

を書いて応募ください！

皆様この哀れな作者をヨロシクお願いします！！

応募待ってます！

## 名前と能力募集（後書き）

作者「お願いします！」「」  
裕也「この哀れな作者をお助けください

」

裕也「今日の沢井はなんか迫力あるな」「フェイト」あがが決まってないからだよ

裕也 side

俺たちは今、LHR、まあ平たく言えば委員会決めとかのあれをやつていた

麻耶「皆さんも」存知の通り、来週の23日から25日までの3日間

教室の1番前の教卓にわれらが委員長の沢井麻耶が立つていて  
と鈍い音が聞こえたので左後ろを見ると、先ほどまで居眠りして  
た義之が顔面を机に打ち付けていた

麻耶「我が校でクリスマスパーティーが催されます」

義之は状況を確認するためか周囲を見回している

麻耶「クリスマスパーティーですが、言つてしまえば文化祭と変わりません。各クラスでの催し物が義務付けられています」  
どうやら義之は状況を把握したのかもう1回寝ようとしたら

麻耶「しかあし！」

と沢井が教卓を強打したので、びっくりして起きた  
義之「うわっ、ビックリした」

アホか

前では沢井がギリギリと忌々しそうに握りこぶしを作りながら俺達を睨んでいた  
義之は怖いのか少し背中が反っている

麻耶「残念なことに、私達のクラスの出し物は未だ、何も決まっていません！」

「なんだよね

麻耶「この議題、LHRで11月からしているのにもかかわらず」

俺達だけじゃね？」

杉並「桜内、桜内」

どうやら義之の左斜め後ろに座っている杉並が声をかけたようだが

義之「ん？」

義之は視線だけを動かして聞いたらしい  
杉並「今日の委員長いつも増して殺氣だっている。居眠りしているとそのまま永眠させられるぞ」

それは流石に言いすぎでは？

？「マツチ棒かなんかで、まぶた支えとけ

と言つたのは義之の後ろに座つてゐる男子で名前は板橋渉いたばしわたるといつてか普通持つてねーよ

義之「マツチ棒、持つてない」

当たり前だ

渉「じゃー、ほら。シャーペン

眼が飛び出るぞ

義之「おー・・・・、ってデカイわっ。眼球飛び出るわ

杉並「くくくく

ちなみにこいつらは3人でよくつるむため通称で悪ガキトリオだ  
義之「・・・って言われてもなあ。いろいろ文化祭でやつた感があるしなあ」

それはなぜかと言つと

杉並「ふむ。我が校はイベント好きだからな。まあ、それでこそ俺も張り合ひがあると言つものだが」

そうこの学校、風見学園はイベントが盛りだくさんなのだ、普通の学校に比べて2倍近いのではなかろうか？

と氣付いたら杉並が懐から黒皮製の手帳を取り出していた  
義之「なんだそれ」

杉並「ネタ帳だ」

義之「お笑い芸人か、お前は」  
確かに

渉「俺も手帳、持つてるぜ」

と渉が制服のポケットから手帳を出したが・・・

義之「ふーん・・・つて、なんで表紙にプリントシールばつか貼つ

てんだよ、女子かお前は！」

所謂プリクラ帳か

涉「可愛いだろ」

いや、むしろ

義之「きもい」

うむ

涉「うわ、きもいはちょっとひどくね？ お前はもつと俺に優しくするべきだ！！」

いやお前の扱いはそれで十分だ

義之「お前こそ、もつと環境に優しくなれ」

うむ

涉「か、環境だあ？ お、俺は環境を汚染してるのかよ・・・」  
まあお前だけが原因ではないが

杉並「環境だけではない。今や板橋は地球規模で汚染存在だ

言い切つたよおい

涉「うわあああ、許してくれ、地球つ！ つてか俺つてすぐくね？」

アホのな

麻耶「ちょっと、そこの悪の根源3人組！」

確かに

沢井は義之たちをズビシツと指で指していた

麻耶「ちゃんと会議に参加しないと、あんたたちに決めてもららうからね」

まあここまで遅れた理由の大半が義之たちが原因だしな  
義之「悪の根源3人組つて、俺も入つてるの？」

なにを今更

麻耶「当たり前でしょう。ふたりがボケで、あんたがツツコ!!」  
まあ妥当だ

義之「いつの間にそんな役割が・・・。心外だ」

最初からだよ  
杉並「では、いつそのこと3人ともボケとこうことでどうだ？」

は？

涉「そうだな。新しい世界が拓けるかもな」

おいおい、それじゃあ

義之「收拾つかんだろーが

その通りだ

と気付いたら静まっていた教室が騒がしい  
どうやら義之たちの漫才で沸騰したようだ

沢井が今にも3人をぶちのめさんとばかりに睨んでいる

麻耶「静かに！！」

と沢井が手を叩いた

麻耶「今、決まらないなら、放課後決まるまで残つてもうつけど」  
それは困る

どうやら全員同じ思いだつたのか一気に静まつた

義之「でも、なにをしたらいののか、ぜんっぜん思いつかーん」と義之が即効で断念した

まあ確かに俺もない

？「人形劇」

と静かな教室に抑揚のない声が聞こえた

声のほうを見るとそこに居たのは

見た目が人形みたいな小柄な女子の雪村杏ゆきむらあんずだった

因みに席は義之の左隣で窓に接している

こいつは人形みたいに小柄で可愛いんだが表情が乏しいので思考が分からぬし、何より、時折吐き出す毒舌が凄まじいのだ、しかしなんでも雪村流絶対暗記術とかを身につけているとかでとにかく頭は良い

杏「人形劇はどうかしら？」

とまた言った

教室内から「なるほど」やら「それもありか」と聞こえてきた

杏「せつかくクリスマスなんだし、ファンタジーっぽい出し物なら文句、ないでしょ？」

ふむ

麻耶「なるほど」

と教卓に居た沢井が頷いた

すると義之の前の女子が手を挙げた、その人物は杏と仲の良い花咲はなさきと教卓に居た沢井が頷いた

あかね

茜あかねだ

茜「はーい。私も人形劇がいいと思いまーす、クリスマスだしい。こう、ロマンチックな物語とかがいいんじゃないかなあ？ 聖なる夜を盛り上げるラブロマンスとかー」

と爆乳で豊満なボディをくねらせながら言つてゐる、恐らく男子の票をお得意の色香で誘つてるんだろ

まあ確かに季節柄ロマンスものには一理あるが

と色香に誘われた男子が次々に手を挙げた

涉「俺も賛成だー」

お前もか、ブルー ス

義之は落胆している

まあそれも仕方ないな杏と茜が結託して意見を出すときは何かしら企てている場合が多い

まあそれは杉並、義之、涉も一緒だが、・・・いや義之は巻き込まれてるだけか？

そして女子2人と義之たちは仲がいいのだ

む？ バランスが悪いって？ 安心しろ女子にはもう1人居るから

杏「ついでに提案なんだけど・・・人形劇のヒロイン役は、小恋・

・・なんてどうかしら」

杏が1人の女子の名前を出したとたん椅子が派手にこけた音が教室に響いた

クラスメイト全員の視線が音源に向けられた

小恋「あい・・・たたたた」

と椅子ごとこけた小柄だが胸が大きいちょこんと出たアホ毛が特徴の女子が椅子を直しつつ、ぶつけたんだらうお尻をさすりながら立ち上がった

小恋「え、な、なに言い出すの、急に～」

今椅子に座ったのが月島小恋<sup>つきしまこい</sup>と言い、仲良し組みの最後の1人だ  
因みに3人の名前の頭文字をそれぞれ取つて通称、雪月花<sup>せづがつか</sup>と呼ばれて  
いる仲良しメンバーだ

補足だが義之<sup>よしゆき</sup>とは小学校からの付き合いで、所謂幼馴染だ、俺達全員で仲良し12人組み（俺とフェイトとアリシアとなのはとユーノ及びはやて含めて）ってわけだ（時々俺が居ていいのかとも思うが）  
気付くと義之<sup>よしゆき</sup>がうな垂れている

小恋「あの、あの、あの～」

小恋は顔を赤くしながら戸惑つている

まあ雪月花の中では1番まともなんよねこいつ

性格よし、顔もよしでクラス内ではくクラス内1番の良心<sup>よしにん</sup>と言わ  
れるほど人気があり、まあヒロイン役に抜擢されても誰も反論しな  
いだろう・・・本人以外は

小恋「そんなのできないよ～」  
な?

杏「大丈夫」

茜「うんうん。小恋ちゃんならできるって」

小恋「な、何を根拠にそんな～」

麻耶「ラブロマンスにするなら、相手が必要ね

・・・なるほどね2人の企みが分かつたよ

杏がフフと笑いながら

杏「・・・相手役は義之で決まりでしょ」

茜「賛成でーす。相手役は義之くんがいーと思いまーす！」  
やつぱり

義之「はえ？」

なにアホな声を出してるんだよ

クラスメイトの視線が義之に集中した

涉「うお、マジかよ。俺じやねーの？」

いやお前は論外

茜「だめだよ。義之くんつていい声してるし、演技もうまいんだから」

義之「俺がいつ演技をしたんだ？」

それはお前あれだろ

杏「仮病で学校を休んだ時」

義之「ぐつ

そうなのだ、義之の奴ゲームをやりたいからって仮病で学校を休んだはいいが、電話越しにやつた熱にうなされた声があまりにも迫真の演技だつたために先生が救急車を手配してしまったのだ、おかげで義之は救急車に乗せられて病院に運ばれて先生が来る直前に脱走、結果、仮病とバレて大目玉を受けた

義之「いやー、あのときはさすがに焦つた。危ない、危ない」

麻耶「照れながら言つてる場合ぢやないでしょ！」

まったくだ

茜「と、いうわけで、どうかなあ？ 小恋ちゃんの相手役は義之く  
んつてことで」

杏「特に問題はないと思つけど・・・」

小恋「ちょ、ちょっと待つて！ そんなの無理、無理！ 義之  
がそんなのするわけないよー。あの義之だよー？」

お前さん本人の前で言つうか

まあ実際義之がこういつた催し物にまじめに取り組んだ覚えは無い  
からな、確かに頷けるが

因みに小恋は赤い顔を更に紅潮させつつ、義之を上目遣いに見てい  
る  
麻耶「ふむ。そうね・・・悪の根源の一人を催し物の重要な役割に  
すれば、悪さも半減するか」

義之「えー。俺つてすんごいマジメで、すんごいいい人なのに。公  
園のゴミとか拾うのに」

説得力〇だ

麻耶「黙りなさい、このわわやかヤクザ  
新しい！？」

義之「や、やわやかヤクザつて何?」

確かに

涉「やわやかな笑顔を浮かべつつ、相手をボコ殴りにする人」

なるほど?.

義之「そ、そんなイメージなの? 俺つて・・・」

ドンマイ

杉並「・・・お化け屋敷か」

義之「は?」

杉並が今までの発言を完璧に無視して言った

杉並「ふむ、お化け屋敷。なるほど、催し物をお化け屋敷にすれば・  
・・、ここをこうしてと、そうだなアレは科学部の連中から拝借す  
るとして・・・うん、これならばあの計画も・・・」

杉並が黒皮の手帳を見ながら何かぶつぶつと呟いている

義之「お、おいおい・・・今の話聞いてたか?」

杉並「聞いていた。月島とお前が人形劇を通じて、不毛な疑似恋愛  
をするという話だらう?」

義之「なんだか身もふたもない言い方だな。つていうかクリスマス  
にお化け屋敷?」

まあ確かにあれはむしろ夏では?」

杉並「季節など関係ない。真冬でも桜が満開のこの島で何を躊躇うためら  
ことがあるだろ?、要は気になるあの子を誘つて、暗闇で告白でき  
る! 2人の密着度、MAX! そんなスーパーラシーお化け屋敷を  
作ることに何の異論があると言つのだ!」

と杉並の口上に男子の野太い歓声が挙がつた。  
その中には涉まで居た・・・どっちだよ

しかし杉並が色恋沙汰に手を貸すような言動をとるか?

こいつは色恋沙汰よりもコトマUFOとか埋蔵金とかUFOとかのオカル  
ト方面にしか反応しないはず、一体何を?  
義之「何を企んでやがる」

義之が俺の気持ちを代弁してくれた

杉並「やだ、なんのこと?」

義之「なんだ、てめえ。その汚れを知らない天使のよつなおとぼけ

顔はー！」

胡散臭すぎる

麻耶「はいはい、静かにー！ 杉並。その意見を出したっていうことは、あんたが責任者になつてくれる。そう解釈しても構わないのね？」

沢井が騒いでいる男子を黙らせて杉並に聞いた

杉並「ふふふ。ホラーハウスのオーナーとでも呼んでくれたまえ」

麻耶「あ、そう」

沢井は杉並の言葉を受け流した

麻耶「どのみち生徒会から目をつけられるだろつけど、でも、もう時間もないし、人形劇をやるにして、物語とか、具体的なイメージはあるの？」

沢井はすり落ちた眼鏡を直しながら杏たちに聞いた

茜「口マンチックに、夢見るよつに」

麻耶「抽象的ね・・・」

杏「既にシナリオ構成は出来てるわ」

そういうや杏は演劇部だつたな

麻耶「なるほど。では、今2つの意見が出たわけだけど、他にはない？」

クラスの皆は人形劇かお化け屋敷で盛り上がっていた

人形劇がほとんど女子で、お化け屋敷がほとんど男子だ

因みに人形劇の場合ヒロインと主役は小恋と義之で既に決まっている、それと小恋は音楽が得意だから（軽音楽部所属）ついでに音楽決め役にも決まつたようだ

因みに小恋は困つた表情をしながらお化け屋敷と言つてている（チラと義之を見ながら）

茜「ね。義之くんはどつちがいいの？」

茜が義之の顔を覗きながら聞いている

義之一どもいいけど、人形劇だつたら、ちよつと大変かな」

哲・大丈夫よ。義之のセリハ、少なくすむから」

義をもつてた。

奇観なる氣がにがる

アリババ二十九ノツカニシテ、ノルノリ。

説書のざ

杏「時間もあまりないから」

杉並「いやいやいや。すまないお嬢さん方。桜内の心は既にお化け

「屋敷で固まつてゐる」

と杉並が義之の肩に手を回しながら言った

涉  
俺もお化け屋敷で賛成だな

茜一渉くん さうき人形劇に賛成だったしやなし

# 研究力とは

「おまえが一時間で何をかせるか見ておる」

アーティストの個性を引き出すためのアートディレクション

歩「あひー。田舎だつて、ああ言ひてみやがん」

茜「小恋ちゃんまで

小恋「だ、だつて、わたし、ヒロインなんて出来ないもん」

小恋の自信なさげな言葉に杏と茜、顔見合わせたよ

涉一 嘴の芝居……ああ、なんて魅惑的な言葉なんだ！俺、

なーとーか!! だあ ああ、 もう心藏バクバク!!

織物が織出の織物は織物の織物

麻耶「んもう！」 静かにしなさーーーい！！ まつたく何度も言わせ

たら気が済むの！？」

沢井が教卓を叩きながら叫んだ

杏「委員長、落ち着いた方がいいわ・・・。あなたがこの議題で『静かにしなさい』って言つたのは、11月から数えて41回よ」  
よく覚えてるね

麻耶「誰も数なんて聞いてないでしょ！」

杏「ちなみに、教卓を叩いたのは11月から28回・・・。深呼吸が必要だと思うわ」

麻耶「く、くだらないこと覚えてないで、静かにしてよね・・・」

で結果多数決にもつれ込んだが、このクラスの人数は奇数だと現在半々に分かれた、最後の1人は義之だ、さてどっちを選ぶかな？

麻耶「桜内・・・」

義之「え、え？」

沢井が呆けていた義之に聞いた

麻耶「早く決めてくれない？ あんたで最後なんだけど」  
義之「はれ？」

お前気付いてなかつたな

杉並「ふつ、わかっているな同志よ」

義之「う」

杏「・・・」

義之「え、えと」

困つてるな

さてどうする？ 親友よ

裕也「なんか面白そうな予感  
フェイト「え？」

裕也「どうなるかな？」

裕也 side

義之「それ以外がいいなあ・・・」

なんすと?

義之はしばらく黙考した挙句そつ言つたのだ

麻耶「はあ?」

沢井が怪訝そうな眼で義之を睨んだ

義之「どうせだつたら、もっと違うやつにしないか?」

義之あ前・・・

麻耶「あのねえ、桜内・・・、今更なに言つてるわけ? 多数決  
なのよ。あと1票で決まるのに、まぜつかえさないでよねー。」

裕也「沢井よ落ち着け」

俺は義之の言葉で案の定で怒つた沢井をなだめた

杏「何か具体的な案があるわけ?」

雪村流暗記術で先ほど義之が言つた「何も思いつかない」宣言を忘  
れていない杏が義之にたずねた

義之「ん~。具体的なものがあるわけじゃないけどさ、せっかくの  
クリパなんだし、もつと盛り上がるものはないのかな~と思つて」

裕也「なるほどね、要するに刺激が足りないわけか・・・」

義之「その通り」

確かに今出ている2つは何処のクラスでもやっていて新しさはない  
からな

杏「まあ、ある意味具体的」

麻耶「具体的なのは方向性だけでしょ? 何をするかは全然具体的  
じゃないじゃない」

茜「まあ、ある意味義之くんらしいよね

小恋「うん・・・」

はやて「そうやね

裕也「ああ」

フェイト「だね」

俺たちは慣れているから義之を見た

麻耶「杉並、あんたからも何か言ってやんなさこよ。あんたたちの案じや、不満なんだつてよ?」

杉並「ふふん・・・・・。面白がつなので、しばらく傍観させてもらひう」

麻耶「はあ?」

沢井が信じられないと杉並を見ている

杏「こうこうとき、義之にまかせておくと、話がとんでもない方向へ流れることがあるもんね・・・」

杉並「そうこうことだ。今年の体育祭然り、文化祭然り・・・」

裕也「ああ、こうこうときの義之は面白こことをやつてくれるからな」

フェイト「はあ、裕也が乗つちやつた」

はやて「まあまあ、フェイトちゃん」

アリシア「そうだよフェイト楽しまなくひや」

そう言つたのはフェイトの前の席に座つている（俺の右斜め前）アリシア・T・ハラオウン、フェイトの双子のお姉さんだ、フェイトとは見た目がほとんど一緒だが唯一違つるのは眼の色くらいで、フェイトは赤に対してアリシアは水色だ

麻耶「とんでもない方向に流れてもらつちや困るのよ、春の卒業パーティーのときみたいなことになつたらどうするの?」

と沢井が困りながら俺達に向けて言つた

義之「杏、卒パでの出し物覚えてるか?」

えーと確かに卒業パーティーでの杏と茜のクラスでの出し物は・・・（去年はクラスが別だつた）

杏「セクシーパジャマパーティーのこと?..当然よ。ね、茜

茜「うん」

思い出した、ここから寝巻き、煙するにパジャマ姿で接客をしたの

だった

義之「そういう感じのせつちやけ具合が欲しいんだよ」

裕也「なるほどね~」

杏「もう一回やつてもいいけど?」

杏が小悪魔的な笑みを浮かべながら言つた瞬間

涉「マジですか!?」

涉が飛びついてきた

義之「ん~、それはちょっと・・・」

涉「なんだよ! 今年のクラスでやれば、杏や茜だけじゃなくて、

月島のパジャマも見れんだろうが」

涉が自分の欲望<sup>エロス</sup>に忠実に叫<sup>ハラス</sup>ぶと

麻耶「板橋・・・」

沢井が涉をギロリと睨んだ

涉「あ、あといいんちょのパジャマ姿も・・・」

涉よそう取つてつけたように言つたら傷つくだけだが

麻耶「・・・はあ」

裕也「まあ、なんだお疲れ・・・」

俺は気休めかもしけんが労わりの言葉を送つた

杏「義之は、セクシーパジャマパーティージャ不満なの?」

義之「別に不服つてわけじゃないけど、それじゃ、卒パの一一番煎じ

になつちまうだろ?」

杏「いいものは何回もやつても、いいものよ」

義之「そうかも知れないけど、インパクトをもうちょっとねえ・・・

・  
茜「インパクトねえ・・・」

なのは「インパクト・・・」

ユーノ「インパクトか・・・」

気付いたら俺たちはクラスで一丸となつて考えていた

小恋「あ、あれは?」

義之「何?」

俺達は小恋を見た

小恋「わたしたちのクラスでは、焼きおにぎり屋さんだったじゃない、あれならインパクト、あるんじゃない?」

義之「焼きおにぎりか・・・」

焼きおにぎり屋とは去年杏と茜と涉以外の届た俺達のクラスでやった出し物だ（途中からある理由で被害が続出したが）これは『美少女が生の手で握つたおにぎり』を焼くという宣伝でやつたのだ、しかも杉並の巧妙な情報操作により爆発的な勢いで売れたのだ

#### 閑話休題

茜「つまり、パジャマパーティーで焼きおにぎりを作るついでにへ

麻耶「なんか一番煎じっぽいわね」

確かに

義之「でも、方向性としては悪くないと思つただよ。じつ思つ?

杉並

杉並「ふ、握つて作られるのは、何も焼きおにぎりだけではあるまい・・・。なあ、委員長?」

む? なぜに沢井に振つたんだ?

麻耶「え? あ・・・」

沢井がなぜか表情を変えた。

どうやら、何か思いついたようだ

義之「思いついたか?」

クラス中の視線が沢井に集まつた

麻耶「え? あ、いや・・・ダメよ。そんなの・・・」

む? 沢井にしては珍しく口ごもつたな

涉「おいおい、発言する前から自分で否定してんじゃねえぞ。ダメ

かどつか、言ってみなきやわかんねーだろうが！」

裕也「渉にしては良い事言つた」

涉  
-  
及  
-  
及  
-  
及

麻耶一え、えと・・・

なぜか沢井は恥ずかしそうにしている

風雨

うしほがひ小説で亥いた

涉「聞こえねぞ」

渉がもう1回催促したら

麻耶「お、お寿司って言つたのよ。」

裕也「なるほど、寿司か・・・・・」

義之と杉並が視線を合わせた

杉並一光明が見えたな

裕也 ああ それだ！

「お前は、おまえの親のアーヴィング、アーヴィングの孫だよ。」

思いつかないぞ！

クラスが一気に活気付いた瞬間だつた

渉「セクシーパジャマパーティー、フィーチャリング寿司屋か。面

白そうだな、ん？ いやセクシー・パジャマ寿司バーがいいかな・・・

•

そんなもんどうでもししゃれ！！

卷之三

杉並「ふつふつふ、タイトルは二れで決まりだ。『セカシ』寿司パ

「一テイ一』、暗号名はSSSR-!-!

名前のインパクトと意味のわからなさ具合がいい感じに合致した  
SSPか・・・。こりや、今年のクリパは寿司の旋風が巻き起こ  
りそうだな

杏「ほらね、義之にまかせると、面白い方向に転がるでしょ？」

茜「うんうん。ホントだね」「

「さあ、さすがは義之くんや！」

小恋 ても いしのかなあり こんなので 。。。

、半うつらうつらの心地で、おひるねの間、かのうな顔にうるさい

沢井が俺達を睨んでいたが、どうやら心の内が

杉並「何を言うか、委員長。俺の中ではすでに決まつたも同然だぞ」

麻耶「お化け屋敷はいいの?」

杉並 ふふん。企画は次回に持ち越しだな……」

麻耶「に、人形劇は？」

## 一縷の希望に望むが

杏・シナリオの構想から練り直すれ・・・

はい、困まれた！

クラスの雰囲気がS.S.P一色に染まる中、沢井だけが滲っていた

杉並「何をためらつ必要があるので、委員長。寿司が食い放題なの

た  
そ

「お寿司が好物だつておっしゃる」

これは決まつたな。

義の一言から始まって、ちょっととした考え方から思わぬ方向に進ん

だみたいだが

皆乗り気になつたのでこれで決まつたな

そして俺達の出し物が暗号名SSPこと『セクシー寿司パーティ』に決まったのだった

選択 後編（後書き）

裕也「さすがは義之だ、期待を裏切らないな！」  
フェイト「いいのかな、非常要員とはいえ生徒会役員なのに、しかも書類まで偽造して・・・」

新しこ出候（前書き）

裕也「わたくしゆづやく毎飯か  
フヒト「裕也、」飯食べよつへ、」

## 新しい出会い

義之 side

む、ようやく俺か・・・

俺は昼休みのチャイムと同時に背筋を伸ばした

義之「くあ～」

と俺があぐびをしたら

杉並「どうだ桜内。一緒にメシでも」

振り返ると、杉並がイヤラシイ笑みを浮かべて立っていた

義之「俺は別に構わんけど、涉はどうするよ?」

俺は机に突つ伏している涉に声をかけた

涉「あー、俺はパスピス。2人で蜜月の時間を楽しんできてくれ」と涉は手をひらひらさせた、ってか嫌な言い方すんな

杉並「ふむ、それではふたりきりの甘いランチへしけこむとするか義之「気持ち悪いこと言つな」

一瞬鳥肌がたつたじやねーか

杏「なるほど、このカップリングはありかもね」

茜「だよね～。なんか色々といけない想像が・・・ねえ、小恋ちゃん?」

小恋「ふえ! な、なんでわたしに聞くの!?」

茜「だつて小恋ちゃん、そういうの好きじゃない」

小恋「そんなことないよ～」

杏「自分の欲求に素直になる。それが1番よ、小恋」

小恋「だ、だから～、違うってば～」

後ろのほうで勝手にキヤツキヤと盛り上がりってる雪月花3人組

アホか

義之「で、どこ行くよ? 学食か? 購買か?」

俺は杉並に問いただした

杉並「ふふふ・・・まあ、黙つてついて来い。とつておきの場所

に招待しようつ

にやりと笑つて、すたすたと教室を出た杉並

義之「しゃーねーな

俺は杉並を追つた

義之「で、どこまで行くんだよ?」

俺は上履きから靴に履き替えながら聞いた

杉並「なあに、ちょっとそこまでだ

そう言つた杉並の後を着いて行き

校門を出でいった

義之 side END

裕也 side

俺はフェイトと一緒に弁当を食べていた

裕也「ふむ、相変わらずリンディさんは料理上手だな

俺はリンディさんが作つた弁当を素直に賞賛していた

フェイト「(ボソリ)うーん、今度は私が作つてみようかな?」

裕也「なんか言つたか?」

フェイト「う、ううん! 別に! -」

裕也「そ、そうか」

俺はフェイトの珍しく強い語氣に少し驚いた

裕也「しかし、義之と杉並は一体どこに行つたんだか」

義之たちは昼休みが始まると同時に教室を去つたきりだ

とその時、ポケットの携帯が震えた

裕也「む? 一体だれだ?」

俺は携帯を開いて画面を見た

裕也「水越先生?」

水越先生とは、本名を水越舞佳みずこしまかといい、保健室の先生だが、本業は

天枷研究所の研究員なのだ

裕也「(ピ!) はい、防人です」

水越「あ、裕也君？ 今いい？」

裕也「はい、丁度弁当も食べ終わりましたし」

俺は携帯を肩で抑えながら、弁当を片付けていた

水越「よかつた、ちょっと手伝つてほしいことがあるんだけど、いい？」

俺は時計を見た、ふむ、まだ時間的にも余裕があるな

裕也「はい、構いませんよ？」

水越「よかつた、じゃあさ今から校門のところに来てくれる？」

裕也「分かりました、少し待つてください」

そう言って俺は携帯を切つた

フェイド「水越先生なんだつて？」

フェイドが俺に聞いてきた

裕也「なんでも手伝つてほしいことがあるんだよ、ちょっと行ってくる」

フェイド「うん、行ってらっしゃい」

俺は教室を出て校門に向かつた

そして校門に着くと

水越「よし来たわね？」

そこにはタバコ(無着火)をくわえた白衣を纏つた女性が居た、この女性が水越舞佳先生だ

裕也「どうしたんですか？」

俺は呼び出した用件を聞いた

水越「ん~？ ちょっと立ち入り禁止の場所に誰かが入ったみたいでね、戦力が欲しいのよ

裕也「なるほど、了解」

俺は了承した

水越「それじゃ着いてきて？」

俺は水越先生に着いて行った

桜公園を抜け道なき道を歩き密林を越えたら俺の目の前に洞窟が  
見えた

裕也「ここは・・・」

水越「ここは”ある存在”を封印していたの、うーん、バリケード  
あつた筈なんだけどな〜」

そう言いながら水越先生は洞窟内に入つていった

裕也 side END

義之 side

俺達の目の前には女の子が眠つてゐるカプセルがあり、そして先ほど俺の膝がそのカプセルの横にあつたスイッチを押してしまつた。すると洞窟内にピコンピコンと電子音が鳴り響いた

義之「どうするよ?」

杉並「ふむ。まあ、押してしまつたものはしょうがない。なるようになるだろ」

義之「ずいぶん軽いな」

杉並「深刻になつたところでどうしようもあるまい」

確かにね

義之「なんだと思う？」  
「俺は指差しながら聞いた

杉並「さあな。まあ考えられるとすればー」とその時電子音が止まつた

義之「考えられるとすれば？」

杉並「こういうことだな」

俺は杉並の視線を追つて力プセル内の少女を見た  
そして、ガツチリと視線が交錯した

義之「なるほどね」

予想通りの結末。

少女は俺を睨みつけていた。

そして何故か拳がプルプルと震えている

そして体を起こした。

しかも勢いよく

ゴーン！！

？「あがつ！！」

義之「・・・・」

まあ、 そうなるわな

杉並「・・・・」

いい音が鳴り響いた。

おかげで神秘性が一瞬で吹つ飛んだよ  
ガラスの蓋がビリビリと震えている

？「き、貴様つ！ 謀つたな！！」

いや、なにも謀つてないです

義之「・・・・てか俺のせいいか？」

杉並「ふむ、難しいところだな」

いや、どうみても俺のせいじゃないと思つんだけど。  
と少女が中でなにかしらの操作をすると。

ウイーンとモーター音がしながら蓋が開いた

？「ちつ！」

少女は上半身を起こすと同時に盛大に舌打ちした  
おでこが赤く染まっている

義之「あの、大丈一」

？「貴様か？」

義之「な、なに？」

？「貴様が美夏を起動したのかと聞いている」

杉並「起動だと!? と言うことはもしやつ！」

杉並が驚きつつどうやらこの子の正体に気付いたようだ

？「部外者は黙つていろつ！」

杉並を少女は鋭く一喝した

杉並「む、むう」

？「なぜ美夏を起動した？ なにが目的だ？」

感情を抑え込んだ低い声。

明確に敵意を持つた視線。

ぴんと空気が張り詰めていく。

いや～偶然です。

たまたま興味本位で洞窟に入り、屈んだ拍子に膝がぶつかって起動  
しちゃいました。

そんなことを言つたら間違いなく殺されちゃいそうな雰囲気だ。

ここは慎重に言葉を選ばないと

杉並「ふつ、ただの偶然だ。屈んだ拍子にこいつの膝が起動スイッチを押しただけだ」

義之「バカかお前はつ！」

思わず叫んだ、つて、声裏返つてゐし

義之「なにをバカ正直にー」

？「・・・そうか。膝が・・・ね？」

俺もバカか！

後悔しても後の祭りだった

少女はゆっくりと身体を起こして、カプセルから降り立つた。

？「・・・偶然に・・・だと？」

少女は伸びをしながら、首をこきこきと鳴らした。  
そして身体を半身に構え、ぐっと拳を握り締めた。

？「・・・ふざけたことを」

ヤバい！

義之「ちょ、ちょつと待つたあ！ 落ち着いて話そつ、な？ な？」

？「人間風情と同じ時間を共有しなければならないと考えるだけで。  
・・・虫唾が走る」

義之「そ、その、勝手に起動したことは謝るよ、ごめん。でも暴力  
ではなにも解決しないと思うぞ、ほら、杉並もそう思うだろ？」  
俺は一縷の希望に縋る思い（不本意だが）で杉並に声をかけた  
杉並「すまない。部外者は黙つていないと怒られてしまうもんで、  
その件に関してはノー」コメントとさせてくれ

こ、この野郎！！

？「覚えておけ。美夏はこの世界で嫌いなものが2つだけある、1  
つはバナナ。そして、もう1つは・・・人間だ！」

ぐいぐいとにじり寄つてくる少女。

？「美夏はずつと眠つていたかったのだ。それを無理やりたたき起  
こした拳句、偶然だと？ それで済まされると思つてているのか。こ  
れだから人間つてやつはっ！」

少女は大きく右拳を振り上げる。

いや、だから暴力はいけないでえ！

？「食らえっ！」

風を切る音。

眼前に拳が迫つた瞬間だった

ダン！

と音が聞こえて、拳が止められた後少女は押し倒されて、その首筋  
に刃が当たられた

？「そこまでよ！」

鋭い声が響き渡つた

？「な、なに！？」

？「俺の親友に手え 出そつとは、いい度胸だな？ 死ぬか？」

？「どうやら間に合つたようね」

どいのどなたか知りませんが、ありがとうございます！」

？「H M - A 0 6型、ミナツね？」

俺は抑えてくれた人物と声の人物を見て驚いた

義之「裕也に水越先生！？」

それは保健室の水越舞佳先生と親友の裕也だった

水越先生の背後からは数人の屈強そうな男性達が俺達を包囲した  
水越「あ、あ、あんたたちだつたのね。こんなオイタしたのは。ま  
つたく」

水越先生は呆れたようにため息を吐いた

義之「す、すいません」

水越「ま、いいわ。裕也君そろそろ解放してくれる？」

裕也「・・・了解」

裕也は、押し倒していた少女の首筋から日本刀を離してから、少女  
を解放した

水越「で、お目覚めはどうかな？ ミナツさん」

水越先生は身体を起こした少女に聞いた

？「聞くまでもないだろう。最悪だ！」

水越「ごめんなさいね。私達としてもあなたを起こすつもりはなか  
つたの。でも、起きてしまったからには・・・」

水越先生が周囲に目配せすると包囲していた男性達が包囲を狭めて、  
裕也が刀を構えた

？「誰も逃げたりなんかしない」

水越「そう。素直で助かるわ、それじゃあ、連れて行つて」

男「了解しました」

そして、少女を取り囲むように連れて行く  
な、なんなんだこの状況は

洞穴の中に変なカプセルがあつて、そこで女の子が眠つていて、ア

ラームが鳴つたと思つたら裕也と水越先生がやつてきて・・・。

H M I - A 0 6 型？ ミナツ？

頭が混乱して

お、落ち着け。

とりあえず情報の整理を一

？ 「貴様たち、なんという名前だ？」

義之「へ？」

裕也「・・・なに？」

突然、話しかけられて思考が飛んだ

？ 「バカか貴様は。美夏は貴様達の名前を聞いているのだ」

義之「え、あ、あつと、桜内義之」

裕也「防人、防人裕也だ」

？ 「桜内に防人か、その名前、覚えておくからな

ぎろりとひと睨みされる。

いや、覚えていいから

裕也「やれやれ」

そう言いながら裕也は刀を鞘に仕舞つて、空間魔法で消した  
そのまま少女は男達に連れて行かれた

水越「まったく、入り口の立て看板が見えなかつた？ 立ち入り  
禁止つて、それに有刺鉄線を厳重に張り巡らせといたはずだけど？」  
杉並「いえ、俺達が来た時には有刺鉄線は切り取られていました。  
立て看板には気がつきませんでした」

杉並がしつと嘘を吐いた、裕也も気付いてるようで杉並を睨んで  
いた

杉並「それよりもさつきの娘は？ H M I - A 0 6 型とか言つていた  
ように聞こえましたが」

水越「はあ、じょうがないわね、彼女はロボットよ。 H M I - A 0  
6 型、開発コードはミナツ」

義之「ロボット！？」

俺は思わず素つ頓狂な声を上げてしまった。そのくらい驚きだった

裕也「なるほど、あの手」たえはやはりそうだったか  
お前は気付いてたんか！？」

杉並「・・・ミナツ？」

水越「ええ、そうよ」

義之「いや、だつてあんな感情豊かなロボットなんて」

確かに、最近のロボット技術はかなりの水準に達していると言つて  
いい。

現在市販されている『ムーム』『ミュー』『ミコー』というロボットを見たことが  
あるが、パツと見は確かに人間そっくりに見える。

しかし、あそこまで感情豊かに動いたりしゃべつたりするロボット  
を、俺は知らなかつた

杉並「うむ。確かにあそこまで見事に人間らしさを持つたロボット  
は見たことがないな」

裕也「ああ」

水越「あの子は特別なの。だからこゝで眠らせていたんだけじね、  
まったく、余計な仕事を増やしてくれて」

義之「すいません」

水越「そうね、悪いと思つてるんならひとつ仕事を手伝つてもうらお  
うかな？」 桜内義之くん

義之「は、はい。俺にできることなら」

水越「うん。それじゃあ、後で放送で呼び出すからよろしくね、と  
いうことで、とつとと帰りなさい。授業ははじまつちやうわよ」

水越先生はこれでお終いとばかりにパンパンと手を叩いた  
義之「はい、失礼します」

俺は水越先生に一礼して、歩き出す

水越「あ、そうそう、さつきの出来事は全部忘れなさい」  
背中にかけられる声

静かに、鋭く。

水越「これはお願いじゃないから。この意味、わかるでしょ？」

杉並「もちろんです」

水越「うん、それならいいわ」

そして洞窟を出た

義之「結局なんだつたんだよ?」

杉並「簡単なことだ、洞穴の中に最新鋭の口ボが保管されていた。  
それをお前が起動してしまった」

義之「水越先生は? どうしてここへ?」

杉並「さしづめ本職は研究所の職員つてことだらう。副職として教  
師をする。そして珍しこことでもない」  
ま、そんなところだとと思つたけど。

裕也「杉並正解な?」

やつぱり

杉並「それにしてすばらしい体験だった。あそこまで生々しい口  
ボを目の当たりに出来るのは」

思い出したように興奮気味に話す杉並

義之「確かに、さてと、つて、あ———つ——」

杉並「どうした?」

裕也「なにがあつた?」

義之「時間だよ時間。授業開始まで後5分しかないじゃねーかよ!」

杉並「ああ。と言つことで少し走るぞ」

義之「ばか! メシは!?」

杉並「あきらめるんだな。その分貴重な体験が出来たんだ。結果的にプラスだろ。」

裕也「それはお前だけだ」

義之「ふざけんな! 僕のメシを返せ!」

杉並「別に俺が奪つたわけじゃないから、返したくても返せんな  
義之「くそ! カロリーが足りてないんだよ!」

俺たちは少ないカロリー（裕也は別）を気にしながら学校まで走つ

たのだつた

新しい出会い（後書き）

裕也「疲れた・・・」  
フェイト「大丈夫？」

## 天枷美夏のデバイスの決定（前書き）

裕也「よかつたな、決まって」  
作者「うむ、確かに」

## 天枷美夏のデバイスの決定

此度は私、京勇樹けいゆうきの作品を読んでいただき誠にありがとうございました。

以前募集した天枷美夏とエリカ・ムラサキのデバイスのうち、天枷美夏のデバイスの能力と名前が決定いたしましたので、お知らせいたします。

決定いたしましたのは、碧さんみどりがご応募してくださいました、デバイス名「クロス（ギリシャ演劇のバックコーラスより）」を採用いたしました。

詳細な設定とバリアジャケットの形状は後日設定に追加させていただきます。

尚まだエリカ・ムラサキのデバイスは決まってませんのでドシドシご応募お待ちしています。

それと、ご応募いただきました設定などは多少変更する場合もありますこともご了承くださいますようお願いいたします。

ここまでお付き合いいただき誠にありがとうございました、引き続き私、京勇樹の作品「D・C?」なのは striker・s 漆黒と桜花の剣士」をお楽しみください。

## 天枷美夏のデバイスの決定（後書き）

美夏「応募ありがとうな！ 美夏も嬉しいぞーー！」

## ベビーハンティング（前書き）

義之「やべえやうすかな」

## ベッドハントティング

義之 side

義之「さてと、今日はどうすつかな」

ホームルームの終わり、放課後の校内。

今後の予定を考えながら、俺は廊下を歩いていたと、その時だつた

まゆき「よつしや、弟くん発見」

と、聞きなれた、でもあまり嬉しくない声を後ろからかけられた。

まゆき「弟くん、今、暇? ってか、もちろん暇よね」

ぐるりと回りこんで、俺の目の前に立つまゆき先輩。

義之「え、えっと……」

さつきは先輩から後光がさしているように見えたのに（何があったた

て? 聞くな）、今は悪魔の尻尾が見える気がする

まゆき「ん? なになに? あまり会いたくない人に会つてしまつて、どうやってこの場から逃げ出そうか考えてる顔をして」

うぐつ！ 銳いつ！

まゆき「ま、弟くんがそんなことを考えてるわけないけどね。ね、弟くん、このまゆき先輩に偶然会えて嬉しいでしょ?」

ぐるりと身を乗り出して、睨んでくる。

義之「そ、それは、もう……」

結局、そう答えるしかないので。

嫌いではないんだけど、苦手なんだよな、まゆき先輩つて。どうやっても、勝ち田無いつて言つた、オモチヤにされるつて言つた。

か。

俺の回答に満足したのか、まゆき先輩はふふんと笑みを浮かべる。

まゆき「んじゅせ、ちよつと付き合つてよ」

義之「付き合つて、どう?」

まゆき「わよつと、そこまで」

そう言つて、まゆき先輩は俺の手を掴んだ。

義之「そんなんしなくても、別に逃げないですよ」

まゆき「やう言つて、昔、何回も逃げたのは誰だつたかしら？」

ジロリとまゆき先輩に睨まる。

義之「あ、あはは・・・・」

まゆき「ほら、とつとと行くよ、あたしもあまり時間無いから」

そう言つて、俺はまゆき先輩に拉致（人聞き悪い事言つなー）同様に連行されたのは、生徒会室だつた。

フェイト「あれ？ 義之？」

そこに居たのはフェイトだけだつた、コの字に並べられた机の一つのイスに座つて書類（かな？）の処理をやつてゐらしい。

まゆき「フェイトだけ？ 裕也は？」

フェイト「裕也でしたらバイトです」

まゆき「ああ、そつだつたね、翠屋だつけ？」

フェイト「はい、そうです」

翠屋みどりやとは正式名称を喫茶翠屋あいさくみどりやとい、なのはの家の高町家たかまちが家族で経営している年中無休の喫茶店だ。

フェイト「で、まゆき先輩、義之を連れてきたのはどうしてですか？」

まゆき「ああ、そつだつた」

義之「忘れられてた！？」

連れてきたのはまゆき先輩なのに！？

まゆき「「ごめん、」「ごめん、」実はさ弟くんに大事な話があつてね」

そう言つて、まゆき先輩は真剣な表情をして俺の方に視線を向けた。うーむ、大事な話ね・・・・、想像がつかん

まゆき「ま、单刀直入に言つわ、弟くん、生徒会の仕事、手伝わない？」

義之「・・・・・、はあ？」

フェイト「ふえ！？」

あまりに予想外な展開に俺もフェイトも間抜けな声を出してしまつ

た。

まゆき「いわゆるヘッドハンティングってやつ? 弟くんの力を生徒会に貸して欲しいの」

義之「いや、その……」

予想外すぎるまゆき先輩の提案に思考が空回りする

まゆき「基本的にね、あたしは認めてるの。弟くんを筆頭に杉並、板橋、雪村や花咲たち付属3年3組の連中の能力の高さはね、だからこそやつかいなのよ。その能力の使い方を徹底的に間違えてるし」

フェイト「あはは……」

いや、そんなことを言われても。

つてか、そもそも俺を筆頭にしないでほしい。（俺は戦 B A A R A の眼帯の独眼竜ではない）

まゆき「ぶっちゃけ、手が回らないのよね。今の生徒会のメンバーだけじゃ、数はそこそこ居るけど、能力的にはあんたたちに敵わないから、だから、弟くんに目をつけたわけ」

義之「……なんで、俺なんですか?」

まゆき「んなもん、決まってるじゃない。一番落としやすいからよ、おとめ音姫おとねえが苦労しているのは弟くんも知ってるでしょ? さつきのやりとりを見てもわかるとおり、通常業務だけでも音姫にかかる負担ってのは相当大きいの、さらにクリパでは色々と問題が起きるからね」

そう言って、まゆき先輩はジト目で俺を見る。

義之「だから、俺は音姫おとねえに迷惑をかけるような」とはしないって」

まゆき「それじゃあ、意味がないのよ、弟くん自身はそう思つてるかもしだれだけど、杉並や雪村は弟くんを利用しようとするわ」

義之「それは、まあ……」

あいつら、なにかことがあるたびに俺に接触してくるしな。

まゆき「気がついたら、知らぬ間に弟くんが計画の中心に仕立てられている可能性も考慮できる、なんだかんだ言つて、弟くんの影響力はバカにならないからね。本人にその気も、自覚もないとしても

さ、んで、生徒会としては、その可能性がある限り、弟くんのマスクを外す訳にはいかないのよねえ、それも、危険ランクAだから、それなりの人員の割り当てが必要だし」

義之「・・・・・」

フェイト「あははは・・・・・はあ」

まゆき「だつたらさ、弟くんをさ、生徒会に取り込んでいたほう  
が安心でしょ、基本的能力が高い上にランクAの人物たちとも接点  
が多い、言つてしまえば、首輪の鈴としては最適な人材なんだよね」

義之「・・・・・」

まゆき「それに、弟くん。音姫のために騒ぎを起さないって言つ  
てるけど・・・・・ほんとのところさ、少し物足りなさを感じてる  
んじやない？ 本来はさ、生徒会側の人間なんだし」

そう言つて、まゆき先輩は挑発的な笑みを浮かべた。

微妙に反論できない感情があるところが少し悔しい。

まゆき「だつたらさ、正しい側の方で正々堂々と大暴れすればいい  
じやない、きっと、音姫も喜ぶと思うよ、すつゞく甘つたるい笑顔  
で、弟くん、一緒に頑張ろうね」とか言つちやつてわ」

頭の中に、まさにその映像が思い浮かんだ。

音姫のことを言わると、ちょっと弱いな。

確かに、色々迷惑とか掛けてきたし。

手助けしてあげたいって気持ちも確かににある。

まゆき「ま、あたしが言いたいのはそれだけ、嫌なら嫌で、断つて  
くれてもだけだ」

そう言いながら、まゆき先輩は指を「キ」キと指を鳴らす。

フェイト「まゆき先輩！？」

義之「そ、それって脅迫つて言つんじや」

まゆき「おほほ、人聞きの悪いこと言わないでよ。これは、交渉よ  
圧倒的力関係の差がある状況で、なにが交渉なんだろうか。

フェイトもまゆき先輩の後ろで「めんつて両手合わせて頭下げてるし  
まゆき「つてことで、もう1回聞くわ。弟くん、生徒会の仕事、手

伝わない？ とりあえずクリパの期間だけでいいから  
そう言って、まゆき先輩は小首をかしげた。

義之「・・・・・」

生徒会の手伝いね～。

正直、この展開は全然考えてなかつたな。

普通にクラスの連中とクラス出展するつもりでいたからな。  
例のセクシー寿司バーティーがどう転がるのかの予想が全然できな  
いけど。

ま、でも、生徒会の手伝いをするといつ選択も悪くないのかもしれ  
ない。

音姉の助けができるつてのは大きいしな。  
少し面倒くさいつて気持ちもあるけどさ。

義之「・・・・・」

俺は少し考えた後、まゆき先輩に答えを返した

義之「申し訳ないですけど遠慮させていただきます。」

俺は自分の気持ちに素直に応えた。

まゆき「ふ～ん、このあたしが頼んでるのに断るんだ？」  
まゆき先輩の目がスーっと細められる。

猛禽類が獲物を狙う時のような目。

つて言うか、完璧に脅迫だよな～、これ。

思わず、やらせていただきますと答えたくなつてしまつ。

フェイント「それじゃ、脅迫ですよ、まゆき先輩・・・・・

まゆき「なにか言った？」

フェイント「いえ、なにも・・・・・

義之「やりますん」

俺は念のためにもう1回言った

何よりせつかくのクリパライフを生徒会の手伝いで棒に振りたくな  
い。

俺が言うと、まゆき先輩の顔が近づいてきた。

まゆき「…………」

義之「…………」

少しの間、見つめあう。

まゆき「…………」

と言ひか、にらみ合ひへ。

戦力的に圧倒的な差があるので、にらみ合ひにならないけど。

まゆき「…………」

つてか、距離が近いですって！

吐息のかかる距離でまゆき先輩はじつと俺の顔を覗き込んでいる。きつとした綺麗な顔立ちで間近に迫られて、思わず視線を逸らしてしまひ。

なんか、いい匂いするし。

まゆき「やっぱダメか～」

まゆき先輩がふつと、表情を和らげた。

まゆき「う～ん、残念」

義之「すんません」

まゆき「いや、別にあやまんなくてもいいよ。最初から無理だらうなあ～て思つてたから、つ～か、もし手伝つてもらえたらいツッキーくらいのイメージでいたからさ、弟くんには弟くんの都合があるもんね」

義之「そりや、まあ

まゆき「んじゃ、今日は帰つてこよ。時間とらせび～あんな

義之「はい、失礼します」

俺はまゆき先輩とフォイトにお辞儀をして、回れ右をする。

まゆき「ま、気が向いたらいつでも訪ねてきてよ、生徒会はいつでも弟くんの手助けを待つてるからね」

俺はまゆき先輩の声を背中に聴いて生徒会室を後退した。

## ヘッドハンティング（後書き）

義之「まさか、生徒会に誘われるとは予想外だつたな、ん？」あれ  
は由夢か？」

由夢「兄さん一緒に帰りましょ」

それぞれの日常 もして・・・(前書き)

おじあ  
音姫「弟くん、みりん取つて?」  
義之「あい」

それぞれの日常 そして・・・

義之 side

俺たちは今、2人で台所に立ち料理していた。  
これが俺達の日常だ。

ぐつぐつと音を立てる鍋から、煮物のいい香りが漂ってくる。

音姫「ん~、もう一味かな?」

義之「ほい 醤油」

俺は音姉が欲しいものを予測して手渡した。

音姫「ありがと」

当たったようで、音姉が醤油で味を整える。

おたまで煮汁をひとすくいして、軽く味見。

音姫「うん。いい感じ、いい感じ はい、弟くん。どうかな?」

口元におたまを寄せられる。

音姫「あ~ん

義之「あ~んとか言つな

俺は、若干気恥ずかしくなりながら言った。

ずずつと、中の煮汁をすする。

口の中に醤油とみりんの柔らかい味が広がった。

文句なしの味付けだ。

流石は音姉。

義之「うん、おいしい」

俺は素直に賞賛した。

音姫「よし、完成~」

コンロの火を止めて音姉がにっこりと微笑む。

音姫「お魚の方はどう?」

義之「いい感じに焼けてるよ」

俺はグリルを覗きながら答えた。

音姉とふたりでの夕食作り。

別段珍しいことでもなくて、むつ日常の風景となつていた。

夕食時になると隣の朝倉家からやつてきては一緒にご飯を作つて、食べて、団欒して、そして帰る。

俺が芳野家に移り住んでからも、半年以上、ほぼ毎日のよつに繰り返ってきた日常だ。

こんな日常もまあ悪くないと思つ。

義之「おーい由夢～、目の用意しや～」

もうひとつ。

俺は、たぶん居間でぐでーっとしてゐるだらつ由夢に声をかける。

由夢「え～、かつたる～」

と、予想通りのなんとも情けない返事が返つてきた瞬間。

音姫「由夢ちゃん！」

と音姉の叱責が飛んだ。

由夢「や、冗談ですってば」

いかにもかつたるそうな台所にやつてくる由夢。

その姿は、ジャージにメガネとリラックスしきつた格好。学校での姿とのギャップが激しいと言つつかなんと言つか。因みにこつちの方が由夢の本性だ。

由夢「や、それにしてもおふたりさん、お似合いだね。まさに新婚さんつて感じですか？」

何時もの対音姉の言葉を言つ由夢

音姫「し、新婚さん～、な、なに言つてゐる由夢ちゃん。やだな～（テレ）」

隣でもじもじとHプロンの裾を弄りだす音姉。

なにを照れてるんだかこの人は。

由夢「妹としましては、仲の良いおふたりの至福の時間を邪魔してしまつのはいかがなものかとちょっと考えてしまつわけでして」

義之「はいはい、いいからとつとと目の用意しや～」

俺は、おふだけとわかつてゐる由夢の言葉を軽くスルーして、由夢に促した

由夢「はーい。兄さんはノリ悪いなー」

ほらな

由夢の（渋々）用意したさらに料理を盛り付けていく。  
肉じゃがに、塩鮭。それどん飯に味噌汁と。

音姫「そんな、新婚さんだなんて・・・」

隣では音姉がどこか遠くの世界に旅立っていた。

いい加減に帰つて來い。

そして俺達は「」飯を食べながら、クリパのことや、番組のことを話したりした。

義之 side END

裕也 side

裕也「ありがとうございました、またお越しくださいませー。」

俺はレジで精算して帰るお客様に向つて頭を下げた。

？「裕也くんお疲れ」

？「お疲れ」

？「お疲れさま」

そう、俺に声をかけてくれたのは、なのはの父親の高町士郎さんと、  
お兄さんの高町恭也さん、それにお姉さんの高町美由希さん、そして母親の高町桃子さんだ。

裕也「お疲れ様です」

俺は同じように返事をした。

なのは「裕也君お疲れ様」

そう言いながら、なのはがキッチンの奥から現れた。

なのはは現在この喫茶翠屋の2代目店長になるべく修行中の身だ。え？ 本当ならばお姉さんの美由希さんがなるはずだつて？ それはダメです。美由希さんが料理を作ると、大抵殺人級の料理に化けてしまつのだ。（美由希さんが作ったお菓子が原因で、以前俺は4時間意識不明になつた。）

桃子「それじゃ、今日はもう閉店ね」

そう言つて桃子さんはドアの札を「OPEN」から「CLOSE」に変更した。

桃子「皆さん今日もお疲れ様でした」

全員「「「「お疲れ様でした！」」」」

俺たちは店長である、桃子さんの前に整列した。

ここ喫茶翠屋では士郎さんではなく、桃子さんが店長だ。

桃子「それじゃあ、忍ちゃん、お願ひね？」

桃子さんがそう言つと、俺の右の6番田、一番端に立つていた月村忍さんが前に立つた。

忍「皆さん、今日もお疲れ様でした」

全員「「「「お疲れ様でした！」」」」

忍「それでは、明日のバイトの方の出勤者の確認をします。まずは有村さんに次に・・・」

なんで、高町家ではない忍さんがそんなことをやつているかと言つと、忍さんはここ喫茶翠屋のチーフウエイトレスで、バイトの人達の出勤などを確認したり、桃子さんの代わりにフロアでの指示出しなどをするのが仕事だ。

因みに忍さんは資産家のお嬢様であり、なのはの兄の恭也さんの恋人だ。

そして、忍さんの確認も終わり

桃子「それでは、今日はこれまで、皆さん明日も頑張りましょー！」

全員「「「「はい！」」」」

解散になつた。

俺がスタッフルームで着替えて帰宅しようとした時だつた。

士郎「裕也くん」

と士郎さんが他の旨に聞こえないように耳打ちしてきた

士郎「あまり、無理はしないように、もし君になにかあつたら、幸<sup>ゆ</sup>  
也<sup>きや</sup>さんと彰子<sup>あきこ</sup>さんに申し訳が立たない」

と言られて

裕也「俺は自分の”罪”を償つまでは死ねませんから」

と言つて俺は翠屋を出た

裕也 side 一時アウト

士郎 side

士郎「”あれ”は君のせいなんかではないのにな・・・」

私、高町士郎は帰宅する裕也くんの背中を見ながら呟く」としか出来なかつた。

士郎 side END

裕也 side 復活

裕也「寒いな・・・」

流石に夜の10時は寒くてマフラーを口元まで上げた。

と、その時だつた、ポケットの中に入れていた携帯が震えた。

裕也「誰だ?」

俺は携帯を開いて確認した。

裕也「メールか」

俺はメールのアイコンをクリックしてパスワードを入力した。

裕也「！」

差出人は・・・Sとだけ書かれており、そしてメールの本文には画面  
いっぱいに”黒”だけが映り、しばらくボタンで下にスクロールす  
ると、10桁の数字が書かれている。

裕也「任務か

俺はそう言いながら10桁の数字を押して通話ボタンを押した。

? 「やあ、ちゃんとメールがいったようでよかつたよ」

裕也「ドクター、今日の任務の場所は?」

? 「場所は風見湾の倉庫群の7番倉庫だよ、装備はすでにウーンナーイに運ばせた」

裕也「わかつた、すぐに向かう」

? 「頼むよ、ガーディアン守護者よ」

と言い通話は切れた、俺は携帯をポケットに突っ込むと目的地に向かい走り出した。

走り出して約10分後、俺は目的地の風見湾のすぐそばに着いた。

? 「裕也、こつちッスよ~」

と聞こえたので声のほうを向くと、そこには肩あたりまで伸ばした赤い髪を後頭部に纏めた俺と同じ年くらいの女の子がいた、この子が先ほど言われたウエンディだ。

裕也「ウエンディ、装備は?」

ウエンディ「ここにあるツスよ」

と手渡された銀色のトランクを、俺は留め金を外して開けて中身を確認した。

裕也「確かに、確認した、着替えるか

と言い俺は周囲を確認して手ごろな小屋を見つけた。

そして中に入り、俺は着ていた制服を脱いでトランクに入っていた黒一色の服を身に纏い、腰には銃を装備して脇には銃の予備マガジンをつけて、頭から足元までスッポリと覆う黒いマントを纏い、最

後は顔に目元に赤い涙のような模様の書かれた白い仮面を着けてから外に出て、ウェンディを見て。

裕也「ゼストさんは？」

と聞くと

ウェンディ「既に展開済みツス」

裕也「よし、では行こうか」

と、俺はフと書かれた倉庫を見た。

第3者 side

倉庫の外には2台の黒塗りの車が停車していて、倉庫のドアの近くには夜なのにサングラスをかけた男達が周囲に目を光させていた。

そして暗い倉庫の中、大きな木箱を机代わりにして、木箱の上にはランタンが置かれ、木箱の周囲にイスに座つた2人を含めて20数人の男達がいた。

男1「で、例の物は？」

と右側に座つていた男が前に居る男に聞いた。

男2「そう焦るな、ブツはあそこだ」

と左側に座つていた男が後ろにある布に覆われた箱状のものを見ると近くにいた男の部下が布を取り払つた。

男1「確かに、確認した」

と、箱状のケージを見ながら言つた。ケージの中には数人の小さな子供がお互いの身体を抱き合いながら、すすり泣いていた。

右側の男が足元から同じようなトランクを木箱の上に置いた。

瞬間だつた。

倉庫の巨大なシャッターが轟音と共に吹き飛んだ。

男1 & 2 「「な、何事だ！！」」

炎の中から1人の黒尽くめの人間が現れた。

裕也「貴様たちの処刑人だよ」

男1 「外にいた連中はどうしやがった！！」

と男が問いただすと

裕也「ああ、それは”これ”のことか？」

と裕也（相手は気付いてない）は右手に持っていた球状の物を男達の方に投げた。

”それ”は1人の男の首だった。

男1 & 2 「「てめえ！…」」

男が声を張り上げると、周囲に居た部たちが懐から銃を取り出した。しかし、気付くと裕也は居ない。

裕也「遅い」

裕也の右手には先ほどまでは持つていなかつた1本の刀が存在して、1人の男の後ろに立つていた。

そして次の瞬間には男の首が切り飛ばされて、血が噴水のように噴き出した。

そこからは一方的な蹂躪だつた、ある男は頭から縦に切り裂かれて、もう1人は胴体を腰から両断されて絶命していく。

そして銃声と肉を切り裂く音が響く。

しかし、裕也の刀はまるで舞うかのように剣閃が走つた。

そして爆発から8分後、倉庫内外問わず男達の死体が転がつた。

? 「相変わらず速いな」

裕也は声のほうを見ると、いまだ燃えているシャッター跡の炎が燃えていない場所に1人のガタイのよく茶色いコートを羽織り、左腕に手甲を装備していて、左手に巨大な槍のデバイスを持った中年の男性が居た。

裕也「ゼストさんもですよ、そちらも終わつたようですね」

男性、ゼストは倉庫の周囲に展開していた戦力の掃討を担当していた。

その証拠に槍型デバイスからは血が滴っている。

ゼスト「ああ、しかし数ばかりだつたな」

ゼストはそう言いながら、槍を振るい血を飛ばした。

ウェンディ「おや？ あたしが最後でしたか？」

とウェンディがシャッターから先ほど別れたウェンディが居た、違うのは右手にまるでサーフボードの様な専用複合兵装の「ライディング・ボード」を持っていた。

そしてウェンディが裕也の近くに来た瞬間、裕也の”左目”がある”幻視”<sup>ビジョン</sup>が見えた。

裕也（これは！）

その幻視は目の前に居るウェンディが身体をくの字に曲げて倒れる映像だつた。

ウェンディ「裕也？ どうしたッスか？」

と次の瞬間にはウェンディが自分に近づいている。

裕也「ウェンディ！」

と裕也はウェンディをタックルしていた。

次の瞬間”死の羽音”が連続して響き、裕也の身体から血が霧のように噴き出した。

ウェンディ「裕也！？」

ウェンディが体勢を立て直しながら叫んだ。

そしてゼストは銃弾が飛んできた方向、つまりシャッターの方を見るとそこには1人の男が手に自動小銃<sup>アサルトライフル</sup>を持っていた。

男3「殺された仲間の仇だーー！」

と男は銃撃を開いた。

ゼストはバックステップして避け、ウェンディはライディング・ボードを楯のように構えて倒れた裕也の前に躍り出た。

ウェンディ（このままじゃ攻撃できないッス！）

とウェンディが危惧した瞬間

？「IS発動、ランブル・トルネイダー！」

と聞こえて続いて爆発音が響いた。

ウェンディ「チング姉！」

先ほどまで男が立っていた場所には粉みじんになつた男の肉片が飛び散り、近くには小柄な体躯に腰まで伸ばした銀髪、右目に眼帯を着けた少女、ウェンディの姉のチングが居た。

チング「ウェンディ、ゼスト撤収するぞ、ウェンディは裕也をドクターの所へ

ゼスト「ああ

ウェンディ「わかつたツス！」

ウェンディは持つていたライディング・ボードを地面に置くと浮き上がり倒れた裕也を抱えながらウェンディは、ライディング・ボードに乗ると

ウェンディ「ISHリアルレイブ発動！」

と言つとライディング・ボードは高速で飛び始めて空に消えた。遠くからはパトカーのサイレンが聞こえ始めていた。

それぞれの日常 そして・・・（後書き）

ウエンディ「裕也すぐにドクターの所に連れて行くッスから頑張る  
ッスよ！」

治療と裕也の・・・(前書き)

裕也「ウエンディー・・・俺は置いていけ・・・」  
ウエンディ「何を言つてゐるつすか!」

## 治療と裕也の・・・

第3者 side

裕也「ウエンディ・・・俺は置いていけ・・・」

と、ウエンディの背中で息絶え絶えになつていてる裕也が言った。

ウエンディ「何を言つてるつすか！」

裕也の言葉を聞いたウエンディは思わず叫んでしまつた。

裕也「俺は簡単には”死なない”知つてるだろ?」

ウエンディ「知つてるつすけど・・！」

確かに裕也はとある理由で簡単には死はない、しかし今は1-2月で

しかも夜だ、気温は0 近い。

しかも、ウエンディは気付き始めていた。

ウエンディ（裕也の体温が低下し始めている…）

下手したら裕也が死んでしまう可能性が高い。

ウエンディ「もう少しでドクターのところに着くつすから…」  
ライディング・ボードで移動し始めてもうすぐ10分経過する、距離的にはもうすぐのはずだ。

と、遠くに見覚えのある建物が見え始めた。

ウエンディ「見えた…！」

ウエンディは内心で喜んだ

ウエンディ（これで裕也を助けられるつす…）

そして、建物の近くでウエンディはボードから降りた。

建物の壁には看板が着いており、看板には「町医者 無限の欲望

J・S 医院」と書いてあつた。

因みに裕也はこの看板を見るたびに「もう少しマトモな名前は思いつかなかつたのか」と言つ。

ウエンディはボードを壁に立てかけて、建物の裏手に回つた。

すると、勝手口が開き、中から1人の男が顔を見せた

？「入れ、準備は整つていい！」

男は髪の毛は紫で肩あたりまで伸ばしており、眼の色は黄色、この男の名前はジエイル・スカリエッティと言つ

ウェンディ「ドクター！ 裕也が、裕也が！！」

と、ウェンディは背中に背負っていた裕也をスカリエッティに見せた。

スカリエッティ「わかつてゐる、早く入れ」

ウェンディは中に入った。

中は仕切りによつて細かく区切られており、部屋ごとにベッドや診察台が置いてある。

スカリエッティはそれらは無視して、さらに奥に進む。

奥には「関係者以外立ち入り禁止」と書かれたドアがあつた。スカリエッティはそのドアを開ける、そこにはロッカーが並んでおり、一番奥のロッカーには「使用禁止」の札が貼つてある。スカリエッティはそのロッカーの鍵を開錠して開けた、すると中には地下に続く階段が存在した。

狭かつたのは入り口のみで、中は広かつた。

少し降りると、下に光が見えた、そして光りを超えるとそこには広大な空間が広がっていた。

奥の壁には巨大なモニターが光つており、画面には様々な情報が流れている。

そして中央には手術台のようなベッドが置いてあり、その周囲には治療道具が台車で置いてある。

スカリエッティ「そこに裕也くんを寝かせたまえ」とスカリエッティはベッドを指差した。

ウェンディ「了解つす、裕也少し我慢するつすよ」

ウェンディはなるべく裕也にダメージを「えな」ように優しく寝かせた。

裕也の傷は遠めに見ても重傷で、左半身に集中しており特にわき腹が酷い。

スカリエッティ「ふむ、既に再生が始まつてゐるが鈍いな、ウーノ

輸血の準備を！」

と、スカリエッティは右手の壁際に居る薄い紫色の髪の毛が特徴の女性、ウーノに言つた。

ウーノ「わかりました、A型でしたね？」

ウーノは棚の引き出しから輸血パックを取り出し、それを台車のトレーに置きながら聞いた。

スカリエッティ「それと、糸と針、後は包帯も頼む」

スカリエッティは続いて指示を出し、ウーノは指示に従い取り出した道具をトレーに置いていく。

スカリエッティ「さてと、治療を始めようか」

と、スカリエッティは言つと、治療を始めた。

そして、約1時間後

スカリエッティ「ふう、これで大丈夫だ」

スカリエッティは持つていた針を置きながら言つた。

ウーノ「この傷は全て銃創ですね、彼が被弾するなんて珍しいですね？」

ウーノは包帯を巻きながら驚いていた、それは裕也の戦闘力と戦闘技術を知つてゐるが故だつた。

ウェンディ「裕也は・・・あたしを庇つたからつす・・・」

と、入り口そばの影になつてゐる所にウェンディが座り込んでいた。

ウェンディ「あたしが気付かなかつたから・・・裕也は・・！」

ウェンディは涙を滲ませながら叫ぶ様に言つた。

スカリエッティ「いたし方あるまい、まさか1人だけ生き残つてゐるとは思わなかつた」

裕也を撃つた男は、偶然生き残つてゐた男だつたのだ。

ウェンディ「それでも、あたしが気付かないといけなかつたのに！」

！」

叫びながらウーンディは拳を血が滲むほど握り締めた。

裕也「仕方ないだろ・・・偶然見えたんだ・・・」

裕也は痛みを堪えるように喋りながら、起き上がった。

ウーンディ「裕也起きちゃダメですよ！！」

ウーンディはすぐに駆け寄つて裕也を支えた。

スカリエツティ「”見えた”のは”左目”だね？」

裕也「・・・はい」

裕也はスカリエツティの質問にゆっくりと返事をした。

ウーンディ「左目ってことは”アイオンの眼”つすか！？」

裕也「ああ」

裕也はベッドから降りた。

裕也「流石はドクターですね、もうほとんど治つてる

スカリエツティ「帰るのかね？」

裕也「はい、エリオとキャロが待つてますから

と、裕也は自分の格好を見て気付いた。

裕也「しまつた、制服と荷物忘れた」

裕也が頭を搔いてると

チンク「これだろ、回収しておいた」

と、裕也の隣にチンクが来て、装備の入つていたトランクと風見学園の指定カバンを手渡した。

裕也「ありがとう、チンク」

と、裕也は受け取ると、制服に着替えて階段に向かう。

スカリエツティ「治療したとはいえ、2日間は無理しないよ！」

裕也「わかりました」

裕也は入り口で返事をすると、そのまま階段を上がつていった。

そして、裕也が去つてドアが閉まる音が聞こえると

スカリエツティ「さて、裕也くんが怪我してしまつたので、しばらくの間は君達頼んだよ？」

と、スカリエツティは室内に居る全員に言った。

全員「「「「はー!」」」

全員返事をすると、階段を上つて去つていった。

それを確認したスカリエッティは近くにあつた、パソコンを設置してある机のイスに座つた。

スカリエッティ「ふう」

と、ため息を吐いた時だつた、パソコンの画面に電話のマークが現れた。

スカリエッティはその電話マークをクリックした、すると画面に水色の髪の毛が特徴の若い女性が映つた。

スカリエッティ「やあ、リンディ」

そう、その女性の名前はリンディ・ハラオウンと言いフェイトとアリシア、そしてクロノの母親である、しかしクロノたちの年齢を考えると40歳は超えてるはずなのが、見た目が30前半か下手すると20代後半にしか見えない。

リンディ『今、じつち警察の現場検証が終わつたわ』

リンディは警察のとある機関の課長なのだ。

スカリエッティ「ふむ、それでどうだつたかね?」

リンディ『ええ、今回も”連中”の関与があつたわね、それと子供たちは全員保護したわ』

スカリエッティ「そうか」

スカリエッティがうなずくと

リンディ『裕也君怪我したわね?』

スカリエッティ「ああ、うちのウエンディを敵の銃撃から庇つたん

だ、”アイオンの眼”で気付いてね』

それを聞いたリンディは画面の向こうで驚いた顔をして

リンディ『”アイオンの眼”を!?』

スカリエッティ「ああ、先ほど帰宅したがね」

リンディ『そう・・・、それと先ほど土郎さんから気になる電話を聞いたのよ』

スカリエッティ「気になる電話?」

リンディ『裕也君ね、「俺は自分の”罪”を償つまでは死ねませんから』って言つたそうよ』

スカリエッティ「そうか……あれは彼も被害者なのにな……」

そう言つてスカリエッティは机の右端に立つている写真たてを見る、その写真にはリンディとクロノに似た男性とスカリエッティ、そして裕也の両親を含めて10数人が写つてている。

リンディ『”あれ”からもう9年なのね……』

スカリエッティ「ああ、そして脱走から11年だ」

スカリエッティはそう言つて引き出しを開けた。

そこには1冊のぶ厚いファイルがあつた。

スカリエッティはそれを出して机に置いた。

表紙には「人工アイオンの眼移植計画」と書いてある、スカリエッティは表紙を捲つた。

そこには今から13年前の日付が書かれている。

スカリエッティはそれを無視してページを高速で捲つた。

そしてとあるページで止まる、そこには「人工アイオンの眼被検体候補者」と書かれており、下には「尚、被検体たちには人工アイオンの眼を使いこなせるために強化手術を施す」と書いてあつた。スカリエッティ「私も愚かだつたよ」

リンディ『……』

スカリエッティは自嘲的な笑みを浮かべてさらにページを捲ると1人の赤ちゃんの写真が写つていてページで止まる。

その赤ちゃんはどこか裕也に似ている、しかし本来名前が書かれている場所には「被検体N.O.E-666」とだけ書かれている。スカリエッティ「彼は最大の被害者なのにな……」

と、スカリエッティはイスの背もたれに寄りかかり上を見上げた。リンディ『ええ……』

リンディもそれに賛同していた……

治療と裕也の・・・（後書き）

リンディ「誰か、裕也君を助けてあげて・・・」

## エリカ・ムラサキの「バイス決定（前書き）

碧さん案をくれてありがとうございました！

## エリカ・ムラサキのデバイス決定

此度エリカ・ムラサキのデバイスが決定したのをお知らせします。  
能力と名前は以下の通りです。

ヘキサ＝ペンタ（名前の由来は六芒星と五芒星から）  
バリアジャケットの形トランプのクイーンの服を白基調に変更したもので、肘まで覆う手袋と膝まであるブーツ。

五芒星形のビットが胸、両手の甲と両足の甲に着いている。

武器はクイーンズスタッフ、トランプのクイーンが持つている杖を薄紫色に変更している、杖の両端に六芒星のビットが3つずつ着いている。

使用魔法王族であるエリカ・ムラサキのデバイスのため防御に特化している、計11個あるビットは攻撃力は皆無に等しく3個で面を形成するとAランク攻撃を完全に防げる程の防御壁を張ることが出来る

使用するビットを増やせば防御力と範囲は広げることが出来る。

11機すべて使えば学園を護ることも可能。

ただし、ビットがムラサキ本人から離れるほど機動力と防御力が低下するため、だいたい100mから200mで使われる、最大で5キロほど離れる距離でも防御壁を形成できるが防御力は低くくなってしまう。

カートリッジシステムは現在は搭載していないがムラサキ本人は搭載する気のようだ。

因みに攻撃力が皆無に等しい事に焦りを感じたムラサキ本人の要請によりクイーンズスタッフは端に鎌のよう魔力刃を形成するように改修してある、モードチェンジによって鞭のようにも使える。

ムラサキは2つをあわせた鎖鎌も使えるようになつており、両端にするか悩んでいるもよう。

五芒星のビットには偵察機能が、六芒星のビットは封印の機能が着

いている。

11機全てを使った最大防御力はプロテクト・ブレイク機能が着いているスターライト・ブレイカーすら防ぎきることが可能  
攻撃力は一般的のストレージデバイスにすら劣る、なお誘導弾の攻撃力は低いが誘導性は非常に高い。

得意なレンジは撤退戦闘と封印作業及び偵察任務だがムラサキの能力により近接戦闘も可能。

AI名はグラーマ、口うるさい婆やのような存在だが、基本的にはムラサキの決定に従うが説教したり助言する。

ムラサキの生存を最優先にしているために時々ムラサキの命令を無視してしまうこともある。

## エリカ・ムラサキの「バイス決定（後書き）

ムラサキ「皆さんありがとうございますー！」

新しこ由欲こ ものへ (漫畫也)

義之「えいつかつかな?」

## 新しい出会い その2

義之 side

涉「う～つす、義之！」

やたらとテンションの高い声と共に、後ろから肩を叩かれる。振り返ると見慣れた（アホ）顔。

義之「ああ、涉か。おはよ」

涉「ん？ どうした？ なんかテンション低くね？」

義之「んな、朝っぱらからテンションあげられるかよ」

大体、俺はそんなキャラじゃないし。

涉「マジかよ。俺なんか今日、朝からすげーわくわくして、めっちゃ早起きしちゃつたつて言ひのこ！ ってことで、せつやく行こうぜー」

そのまま涉は教室とは反対方向へと歩いていく。

義之「行くつて、どこ行くんだよ？ 教室、そっちじやねえぞ」

俺は方向音痴にでもなったのか、筋違いな方向へと歩く涉を呼び止めた。

涉「はあ？ なに言つてんだよ義之くん、行くつて言つたら見学に決まつてるだろ？」

義之「見学？」

涉「ああ」

義之「なんの？」

涉「転校生だよ、転校生。今日、うちの学校に転校生がふたり来るつて。義之も聞いてるだろ？」

義之「いや、知らん」

俺は正直に答えた。

涉「ちよあ、マジかよー。お前なー、あんだけ尊になつてるのこ、元のめぐらへ、あんだけ尊になつてるのこ？」

義之「読むわけないだろ」

あんな怪しいの。

涉「マジでっ！」  
うるさい。

驚きの表情を浮かべる涉。

つてか、本当に読んでるヤツがいたことの方が驚きだよ。  
杉並のヤツの満足そうな顔が一瞬、脳裏に浮かんで、少し嫌な気分  
になる。

義之「んで、その転校生はウチのクラスに来るのか？」

俺は正直な質問をぶつけた。

涉「いや。ふたりとも付属だけど、ひとつは2年、もうひとつは1  
年だつてさ」

だつたら俺が知るわけないがな。

涉「なんでも、ふたりともかなりの美少女らしいぞ、この時期に転  
校してくる下級生。しかも美少女！ たまらんなあ、義之！」

そう言つて、ぐへへとだらしない（放送ギリギリ）笑みを浮かべる。  
つたく、朝からホント元気なやつだ。

涉「だから、ほら、早速行こうぜ。職員室」

自首しにか？

義之「いや、俺はいいよ。そんな興味ないし」

涉「はあ、なに言つてんの、お前？ 美少女がふたりも来るんだぞ  
？ それを、それをーーっ！ 興味がないとおっしゃるのですか、  
あなたは！」

ぐいっと身を乗り出してくる。

呼吸も荒く（まるで「ゴゾ」の変態みたいに）。

涉「あ、そーですか。そーいうことですか、義之さん、まあ、すで  
にモテモテの義之さんには、転校生なんて興味の対象になんてなら  
ないわけですね、転校生に期待を膨らませてる僕らを見て、冷やや  
かな笑みを浮かべているわけですね、くきーっ！」

義之「べ、別にそういうわけじゃないけども  
てか、モテモテってなんだ

涉「だつたら一緒に見学に行こうよ」

義之「いや、別にひとりで行けばいいだるうが」

涉「だ、だつて、なんかひとりで見に行くの、ちよつと怖いじゃん、だから一緒に行こう。ね、義之くん」

身体をくねくねさせながら俺の手を取つてくる。  
つてか、きもい。

つたく。

義之「わかつたよ。行きやいいんだろ、行きやあ」

涉「おお、心の友よ」

そして、涉にがつしりと肩を組まれた。

ジャ アンか

涉「んでは、新しい出合いを求めて、れつづらう」

涉に引っ張られるよつこして、俺たちは職員室の方へと向かつた。

涉「ありや？ 誰も居ない」

職員室前についたところで、涉がきょろきょろとあたりを見回す。

涉「おつかしな。俺の予想だと、職員室は転校生を一目見よつて大勢の生徒でごつた返しているはずなのに」

あほか

義之「みんながみんな、お前と同じ発想なわけないだろ？」

そうしないと、他の連中がかわいそうだ。

涉「んなこたーない！ 男つて言うのは美少女転校生が来るつて聞けば職員室まで見に来る生き物なんだよ」

義之「さいですか」

お前の思考が既に負け犬なのは気のせいかも、実際はひとりもいわけだが。

涉「おかしくな」

涉はそのまま職員室のドアの隙間から中を覗き込んだ。

どこのストーカーみたいだな。

義之「それらしいヤツはいるか？」

俺は覗き込んでいる渉に聞いてみた。

渉「いや、なんの変哲もない職員室風景だな」

なんだよそれ

義之「転校生が来るってのは正しい情報なのか?」「俺は一応確認した。

渉「ああ、なんせ非公式新聞に書いてあつたからな」「義之」

「バカだ、バカが居る!!」

渉「な、なんだよ。その沈黙は」

お前が愚かだからだよ

義之「他の情報源は?」

まさか

渉「ない」

マジで真正のバカだ!!

義之「」

渉「あんだよ」

お前のバカさ加減に呆れてるんだよ!

義之「いや、別に」

俺は怒りたい気持ちを押さえ込んで返事をした。

確かに非公式新聞部・・・・・ってか杉並の情報収集能力はすごいものがあるけど、それと同じくらい<sup>ガセ</sup>適当なことを言つからな。

ガセの可能性もあるってことか。

俺はポケットから携帯を取り出して時間を確認した。もうすぐホームルームが始まる時間だった。

義之「とりあえず、一旦戻る<sup>ガセ</sup>。その転校生の情報自体、正しいかどうかの判断がつかん

つてか、これで遅刻でもしたらばかみたいだしな。

渉「いや、俺はもうちょっとだけ」

そう言って、渉はもう一度職員室を覗きに行つた。しうがない。

俺は教室の方へと足を向ける。

義之「んじゃ、俺は先に戻つてんぞ」

振り返つて、涉にそう声をかけた瞬間だつた。

? 「あ！」

と、驚いた声

? 「きや！」

ぼすんと胸元に衝撃。

そして、

義之「うわっ！」

そのまま俺の視界が天井を向いた。  
身体が後ろに倒れる感覚。

どすっ！

痛え！

義之「あだつ！」

背中を打ち付けられる衝撃。

視界が暗転する。

義之「いててて」

そして、身体に圧し掛かる重み。

右手のひらには柔らかい感触。

義之「ん？ なんだ、この感触は？」

手のひらを握りこむように動かすと、その柔らかな物体も俺の手の動きにあわせて形を変える。

義之「・・・って」

視界が戻つてくると同時に、俺は状況を理解した。

? 「あ～あ」

? 「やつちやつた・・・・

む？ この声は？

俺は聞き覚えのある声に思考を向けてしまつた。

女の子「・・・・・」

改めて俺は目の前の少女に視線と思考を戻した。

田の前には美少女の顔。

こんな状況でも思わず見惚れてしまつてしまつての美少女だった。

義之「・・・・・」

女の子「・・・・・」

義之「・・・・・」

女の子「で、あなたはいつまでわたしの胸を触つてらひしゃるのつ  
もりなのかしりつ？」

義之「あ、『』『めん』！」

俺は慌てて右手を離した。

女の子「・・・・・」

田の前には、あらうと俺を睨んでいる女の子の顔。

女の子から発せられる、甘い匂いが鼻腔をついた。

女の子「・・・・・」

義之「あつと、あの、最初に言つておへ。わかつてこぬとは思つた  
ど、これは事故だからな」

女の子「・・・・・」

義之「その、まあ、なんだ。とつあえず、一回落ち着いて話をしよ  
うじやないか」

女の子「・・・・・」

義之「いや、その、キミが非常に立腹だといつ」とも、感情がそ  
こに到るまでの過程も十分と言つていよいよ理解しております。た  
だ、暴力では何も解決しないこと思つんだ、とつあえず、その振り上  
げたまま、ふるふると怒りに打ち震えてこる右手を下ろしていただき

くと・・・

裕也「義之、諦めひ

フロイド「言に訳はかつ」『悪じよへ』

やつぱりだめか

女の子「このおおおおお、スケベおとしよおおおお」

女の子の右腕が振り下ろされた。

義之「ちよ、ちよつと待つ！」

怒声と共に風を切る音が聞こえて、  
パシン！

義之「ほげつっ！」

頬に強い衝撃が駆け抜けた。

一瞬、視界が今度はホワイトアウトする。

女の子「はあ、はあ、はあ・・・・、もひ、さいつてーー！」

女の子は怒声と共に立ち上がり

肩で息をしながら、俺を見下ろしている。

義之「いや、だからー」

俺は弁明しようとしたが

女の子「うるさいーー！」

女の子は気付くとバリアジャケットを展開した。（設定はデバイス  
決定を参照）

義之「ちょっと？」

女の子の持っていた杖の上端にあつた六芒星マークの小物が外れて、  
そこから鎌の様な魔力刃が形成された。

裕也「やれやれ、フェイト、クロノさんに連絡して  
フェイト「わかった」

後ろからそんな声が聞こえたが、今の俺には意味は無い  
女の子「死になさーーーー！」

女の子は魔力刃の形成された杖を俺めがけて振り下ろした、  
が、次の瞬間

裕也「はい、そこまで」

と、聞こえて魔力刃は裕也の左手の人差し指と中指で止められてい  
た。

裕也「はい、そこまで」

転校生の女の子が振り下ろした薄紫色の魔力刃は裕也の左手の人差し指と中指に挟まれて、義之の髪先寸前で止まっていた。

女の子「なつ！？」

しかも、女の子の首筋には刃渡り40cmほどの刃が向けられていた。

義之「助かった・・・」

女の子が驚き、義之が安堵していた。

裕也「流石にやりすぎだ、今回のは出会いがしらの事故だ、最初のビンタは見逃したが”これ”は見逃せない」

裕也は左手で魔力刃を止めながら女の子を睨んだ。

フェイト「それに、校舎内でのデバイス展開は校則違反だよ？」

ほら、と、フェイトは生徒手帳を見せた。

そこには校舎内での校則第9条特別項目第12項く校舎内でのデバイス展開は緊急事態以外全面禁止ゝと書かれていて、その下にはく尚、生徒会役員及び風紀委員は許可を得てからならば展開可能ゝと書いてある。

女の子「ですが！」

裕也「言い訳無用」

?くお嬢様、彼の言う通りでござります！」

女の子「グラーマまで！」

裕也は転校生が持つてゐる杖の中間を見た、そこには紫色の丸い宝石が埋まつており、それが点滅していた。

裕也「なるほど、インテリジェンスデバイスか  
グラーマくそれに彼の刀、かなり厄介ですよ」

女の子「どういうこと？」

グラーマく私のプロテクションを切り裂きました

女の子「なー？ グラーマのプロテクションを！？」

裕也「やはり、防衛特化型のデバイスか、他のプロテクションより硬かつたからな、だがこの鉋切長光かんなぎりながみつの刃には意味を成さないぞ？」フェイト「”切る”ことならば裕也の持つてる刀のなかでは最強だつけ？」

裕也「ああ、俺の知る限りだがな、今まで切れないつてのは無かつたな」

その時だつた。

？「ここか？ デバイスを無断展開した転校生が居るというのは」と、裕也たちの後ろの階段から耳が見えるくらいで切られた黒髪に若干童顔氣味な男子が数名の風紀委員会役員を連れてやってきた。

裕也「ええ、そうですよ、クロノ先輩」

その人物の名前はクロノ・ハラオウン、名前で分かること思つがフェイトとアリシアの兄に当たる人物で、風紀委員会の副会長を務めている。

更には風紀委員会精銳部隊くアースラゝを率いる部隊長でもある。クロノ「やれやれ、君達彼女を風紀委員会室まで連行」

風紀委員会役員「「はい！」」

裕也「義之と渉は教室へ戻れ、後、渉デバイスを展開しなくてよかつたな？」

渉の右手には渉のインテリジェンスデバイスの「ブリューナク」の待機形態の青いカードがあつた。

義之「先に戻つてるぞ？」

渉「おお、因みに展開してたらどうなつてた？」

渉は氣になつたのか、恐々とした様子で聞いてきた。

クロノ「最低でも反省文10枚だな、最高で30枚」使う用紙は作文用の3000文字のものだ。

渉「マジで！？」

裕也「おおマジだ」

フェイト「うん」

義之「相変わらず、デタラメな刀を持つてることで」

裕也「ついでに、シグナム先生に生徒会関係の用事で少し遅れると  
伝言頼む」

フェイト「私も」

シグナム先生とは、裕也たち付属3年3組の担任で、体育教師のいつもジャージを着てているピンク色の長髪をポニー・テールに纏めている女性だが、その正体は、はやての有する魔道書の「夜天の書」の守護騎士プログラムとやらで、まあ、人間に近い人工生命体だ。

義之「わかった」

涉「任せとけ」

裕也＆フェイト「頼んだ」

そうして、涉と義之は教室へ、裕也とフェイト、そしてクロノ達風紀委員会は風紀委員会室に向かった。

新しい出会い その2（後書き）

クロノ「キリキリ歩け」  
女の子「なぜ、わたしが・・・」  
グラーマ「自業自得です」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4465y/>

D・C?なのはstriker's 漆黒と桜花の剣士

2011年12月1日21時56分発行